

SDGs未来都市等提案書(提案様式1)

平成30年3月20日

大野市長 岡田 高夫

提案全体のタイトル	「水への恩返し」を通じた持続可能なまちづくり ～人口3万・福井県大野市の挑戦～
提案者	福井県大野市
担当者・連絡先	



水への恩返し
Carrying Water Project

1 全体計画(自治体全体でのSDGsの取組)

① 将来ビジョン

(1) 地域の実態



【概況】

当市は、福井県の東部に位置し、北は石川県と勝山市、東と南は岐阜県、西は福井市と今立郡池田町に接している。当市のあけぼのは、右近次郎遺跡などから出土する石器や土器により、縄文時代中期であることが明らかにされている。

安土桃山時代、織田信長の部将である金森長近が亀山に城を築き、その東麓に築いた城下町が当市の市街地の起こりで、江戸時代は、大野藩4万石の城下町として栄えた。その後、昭和29年(1954年)に大野町、下庄町、乾側村、小山村、上庄村、富田村、阪谷村及び五箇村の2町6村が合併して市制を施行し、昭和45年(1970年)に西谷村、平成17年(2005年)に和泉村を編入し、現在に至っている。

人口は、平成27年国勢調査における確定値で3万3,109人。国立社会保障・人口問題研究所による推計人口は、平成52年(2040年)に2万1,525人となっており、人口ビジョンにおいて同年の目標人口を2万7,000人と設定している。

面積は872.43平方キロメートル。福井県全体の2割を占め県内最大で、市域の87%が森林となっている。

産業は、農林業と繊維産業を基幹産業とし、農業は米をはじめ、サトイモ、ナス、花き、ネギ、ソバなどが特産品として有名で、製造業は伝統ある繊維産業に加え、電子部品製造など新たな産業が当市を支えている。その他、緑豊かな自然と城下町など歴史資産を生かした観光にも力を入れており、新たな産業化に向けた取組を進めている。

交通は、国道157号が南北に、国道158号が東西に走り、東は東海北陸自動車道、西は北陸自動車道と連絡している。長野県松本市と福井市

をつなぐ高規格幹線道路である中部縦貫自動車道は、現在、北陸自動車道福井北ICと大野IC区間が平成29年（2017年）7月に開通し、東海北陸自動車道白鳥ICまでの区間は整備が進められている。

また、JR越美北線が国道158号にほぼ並行して走り、JR福井駅まで乗り入れ、JR北陸本線と接続している。

【まちの特長】

「結（ゆい）の心」と「豊かな水」とが共存する城下町

当市では、「北陸の小京都」とも呼ばれる城下町としての歴史や、湧水文化を背景とした水循環のまちとしての歴史も含め、まち独自の資源・ブランドを背景として、『「人を結び、時を結び、地域を結ぶ」ここは、あなたの心のふるさとです。』をブランド・コンセプトに、「結の故郷（ゆいのくに）越前おおの」をブランド・キャッチコピーと定め、魅力ある資源を越前おおのブランドとして磨き上げる「越前おおのブランド戦略」を掲げて、総ブランド化に取り組んでいる。「結」とは、昔の村の生活において、田植えなどの農作業や屋根の葺き替え、冠婚葬祭などのさまざまな仕事や行事を近所の人々がお互いに助け合う習慣のことで、当市にはこの古き良き伝統が現代まで大切に残されている。例えば、今冬の大雪のような雪害が発生した場合でも、自宅前の道路の雪かきや高齢世帯の屋根雪下ろしボランティアなど、いたる所で「結」を感じることができる。

また、大野市民憲章に「純朴さの中にも幕末の大野丸に象徴される進取の気象と雪国特有の粘り強さ」とあるとおり、幕末に大野藩の財政危機を救うため藩船「大野丸」を所有し、全国に藩営商社「大野屋」を展開した実績など、当市が地域と地域を結び、またそこに暮らす人々を結びつけてきたという意味も「結」には込められている。

まちの顔といえる城下町は、16の寺院が立ち並ぶ寺町通りをはじめ、400年以上の伝統ある七間朝市が立つ七間通り、電線地中化や歩道拡幅を行ったシンボルロードの六間通りなど、短冊形の区割りで構成されており、「天空の城」として注目を集める越前大野城や武家屋敷など教育文化施設も多く立地している。湧水も豊富で、陸封型イトヨが生息する世界的南限である「本願清水（ほんがんしょうず）」が国の天然記念物の地域指定を受けており、その水脈を城下町に引き込む町割りが今に残るほか、名



ブランドロゴ

水百選の「御清水（おしょうず）」に代表される湧水地がいたる所に存在する。

平成20年（2008年）7月、「原点への回帰～人が集い、活気に満ちた城下町の再生を目指して～」をコンセプトに、中心市街地活性化基本計画の内閣総理大臣認定を受け、2期10年にわたってハード・ソフト両面から取り組んでいる。

多目的広場兼駐車場として越前おおの結ステーションや城下町東広場、城下町南広場など社会基盤を整備するとともに、商店街の振興、大野商工会議所などが中心となり設立した「株式会社 結のまち越前おおの」への支援を通じて官民が連携して取り組んだ結果、越前大野城など中心市街地主要4施設の年間入込客数、歩行者通行量とも数値目標を上回っている。



天空の城「越前大野城」

また、当市は標高1,000メートル級の白山の支脈に囲まれた盆地で、福井・坂井平野に流れ込む九頭竜川の源流に位置し、日本百名山「荒島岳」に代表される緑豊かな自然と四季の移ろいが感じられる田園都市である。山々からの雪や雨などにより水が伏流水となり地下に貯えられ、市民の生活用水は地下水が主となっていることから、誇りある資源として「水」が挙げられる。

地下水が地域の生活水の大部分を占め、かつその水質が素晴らしいという例は世界でも稀有であるとされており、そのような環境の下、当市独自の水文化が育まれてきた。内閣官房水循環政策本部事務局が公表した『平成27年度水循環施策（水循環白書）』において、当市の水資源の保全等にかかる取組が好事例として紹介され、平成29年度には「先進的な流域マネジメントに関するモデル調査」の実施団体として、当市が全国の6団体の1つとして選ばれている。

また、水ジャーナリスト第一人者である橋本淳司氏から、地下水を水源とした当市の水道水を「日本一おいしい水道水」と発表いただくなど、外部からも高く評価されている。

平成30年（2018年）に開催される「福井しあわせ元気国体・大会」、平成32年（2020年）の東京オリンピック・パラリンピックなどを契機に、「結の故郷」を支える大野人（おおのびと）が持ち合わせる「助け合

い、支えあう文化、人間性」を前面に出し、「結の心あふれるおもてなし」意識を高める取組を進めることで、水をはじめとした当市の資源をより戦略的に活用し、当市の抱える大きな課題である「雇用の確保」や「稼ぐ力の向上」にしっかりと結びつけ、持続可能なまちを目指すこととしている。



陸封型イトヨ生息地の南限として、国の天然記念物の地域指定を受けている「本願清水」(写真左)と市の魚でもある「イトヨ」

【地下水とともに生きる大野人】

(1)「水の箱庭」と呼ばれる水循環環境

◆市街地における井戸の分布図



市街地における井戸の分布図 (中心部抜粋)

井戸の掘削時期

- ~S49 : 1816 井
- S50~S63 : 2843 井
- H1~ : 2002 井
- 不明 : 1502 井

当市の豊かな水は、生活用水として利用可能であるばかりではなく、一つの自治体内で地下水の流れが完結しているという極めて特異な水循環環境を有している。そのことにより、市民生活に深く関与する中で脈々と

受け継がれた独自の生活様式や文化を醸成してきた。

例えば、宅地造成に伴い井戸を新たに掘削し、ほとんどの家庭において地下水をくみ上げ飲料水やお風呂・洗濯などにそのまま使用している。(井戸は市内に約8,000本存在し、全世帯の約70%が所有)

さらに、当市が国土交通省や総合地球環境学研究所、筑波大学などといった産学官から水循環・資源の研究フィールドとして注目を浴びており、安定同位体や地下水情報図簿の作成などの共同調査を行っている。

(2) 乗り越えた地下水枯渇の危機

地下水位の低下する冬季に雪の融雪などによる使用が増えたことなどが原因で、昭和40年代後半から50年代にかけて最大で1,000本の井戸枯れが発生した。

それまで「あたりまえ」と思っていた水の「ありがたさ」を市全体で保全活動へとつなげていくため、当市では、昭和48年(1973年)に地下水対策審議会を設置、昭和52年(1977年)には地下水保全条例を制定して、地下水保全の土台づくりを進めるとともに、市民総ぐるみでの地下水保全活動を促進するため、昭和51年(1976年)からは地下水位の計測をスタートした。現在では市内32の井戸で計測しており、このうち半数の井戸は1年365日、地域住民自らの手測りで測定し、地下水表示板に掲出することで、市民共有の財産として地下水を守り、ともに生きていく意識の醸成を図っている。

平成8年(1996年)には平家平(へいけだいら)のブナ林196ヘクタールを購入し、地下水保全のシンボルとして活用するなどの活動が認められ、同年には市全域が国土庁の「水の郷百選」に選定された。平成12年(2000年)には地下水保全基金を設置し、企業や個人からの寄附を積み立てて保全活動に助成するなど、市全体で活動を支えている。

◆本願清水の様子(写真左・昭和34年、写真右・昭和53年)



(3)「水への恩返し」を通じて経済、社会、環境の好循環へ

当市の恵まれた水を、市民自らが「あたりまえ」ではなく「ありがたい」ものと認識し、環境保全活動を展開してきたが、平成27年(2015年)からは地方創生の取組として、そのありがたさを「水への恩返し」としてさまざまな形で世界中と分かち合うことを通じて、地球の将来や人々の幸せに貢献していくことを目指すプロジェクト「水への恩返し Carrying Water Project」(以下、「CWP」と表記)を実施している。

この活動は、経済、社会、環境の三側面に向けた総合的な取組であり、地域資源である「水」による外部からの評価や関係人口の増加による市民の自信と誇りの醸成、研究機関や企業の誘致による定住人口の増加を目指す『ソーシャルな人口減少対策』と位置付けて実施している。以下、現在の取組を列記する。

- ①東ティモール民主共和国への支援
- ②水の知見の集積と水の大切さや知識を学べる『水の本』作成・活用
- ③水環境のすばらしさが生んだ食の価値を「稼ぐ力」に
- ④水の豊かさの土台となる水環境の保全、継承
- ⑤水の豊かさを官民連携で推進、賛同の輪の拡大

(2)2030年のあるべき姿

水に関する国内外の多様なパートナーと連携した活動による新たなまちづくりの展開と、それを支える結の心あふれる大野人の育成により、水の聖地として「福井県大野市」が認知され、日本の豊かな国土の保全と持続可能なまちを目指す。



(3)優先的に取り上げるゴール、ターゲット

1. 経済

【ゴール 8 ターゲット 8.3】

【ゴール 11 ターゲット 11.4】



CWPに賛同した企業の誘致などにより、雇用の確保や働きがいのある職場づくりを進めるとともに、食を通じた地域活性化を官民連携して推進することは、経済成長とともに水の聖地としてまちに市民が住み続けることにつながる。

2. 社会

【ゴール 6 ターゲット 6.4】

【ゴール 17 ターゲット 17.17】



CWPを通じて、東ティモール民主共和国への水供給施設の設置による国際貢献の実施や、すべての生物が生きていくために欠かせない「水」という資源を通じて関係する国内外の多様なパートナーと連携することは、人口減少時代における関係人口の増加に寄与する。

3. 環境

【ゴール 6 ターゲット 6.5】

【ゴール 12 ターゲット 12.8】



CWPの土台となる水環境を保全する上で、子どもたちからの水環境教育、若い世代の人材育成などを通じて「水への感謝」を伝えることは、限りある資源を使う責任意識の醸成や世界における水不足の現状への理解を深め、持続可能な管理を確保することにつながる。

② 自治体SDGsの推進に資する取組

(1)自治体SDGsの推進に資する取組の概要

「水への恩返し Carrying Water Project」(CWP)

①東ティモール民主共和国への支援

【ゴール6 ターゲット6.4】



結の心に基づき、グローバルな水問題への貢献として、アジアで最も水環境が厳しい国の一つである東ティモール民主共和国に対し、市民や水関連事業者が行う寄附などを通じて水供給施設の設置支援を行っている。これは、「2030年までに、全ての人々の、適切かつ平等な下水施設・衛生施設へのアクセスを達成し、野外での排泄をなくす。女性及び女兒、並びに脆弱な立場にある人々のニーズに特に注意を払う」ことに寄与する取組である。

平成28年(2016年)1月、日本ユニセフ協会とパートナーシップを締結した。年間10万ドルの支援を3年間にわたって行う協定は、日本ユニセフ協会でも地方自治体とは初めてであり、この趣旨に賛同した市民や事業者による寄附により平成28年、平成29年と2度にわたる支援を実施した。

また、独立行政法人国際協力機構(JICA)や国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)などと連携して、東ティモール民主共和国に整備した水道施設の維持管理にかかるノウハウの提供や技術支援などを展開するとともに、特産コーヒー豆のフェアトレードによる購入など継続的な支援を行う事業者・団体などとの連携強化を図ることで、水環境の保全に取り組む両国にとって欠かせない人材の育成を進める。

そのほか、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとして選定されたことを契機とした市民レベルでの交流を通じて、お互いの文化を分かち合うことで、市民が普段あたりまえに使っている水のありがたさを再認識し、自信と誇りの醸成を図る。



②水の知見の集積、水の大切さや知識を学べる『水の本』
作成・活用【ゴール 12 ターゲット 12.8】



蓄積された水に関するさまざまな研究成果や知見を、当市をフィールドとして活動する大学などの研究機関に活用していただくため、インターネット上で公開するなど集積を進めている。

また、世界中が抱える水問題を、子どもたちが考えながら水の大切さや知識を学べる『水の本』を、平成29年（2017年）に4万部作成し、全国の小中学校、高校と特別支援学校に配布するとともに、水教育を進める公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（B&G財団）にも贈呈した。これは、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」「2030年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」に寄与する取組である。

その配布・贈呈と合わせて出張授業などを展開するこの「水のがっこう」の取組を通じて、水について学び、大切さを実感し、世界の水を考える将来を担う子どもたちの育成に努めることとしている。



今後は、多言語に翻訳するなど、全世界に向けた情報ネットワークの構築などを通じた水に関する研究活動などを推進することにより、世界の水問題に貢献する人材、ノウハウ、知見の集積を図る。



③水環境のすばらしさが生んだ食の価値を「稼ぐ力」に
【ゴール8 ターゲット8.3】



水環境のすばらしさや湧水文化の価値を食というメディア（媒体）の形にし、より多くの人にそのおいしさを体験してもらうことを通じ、水への感謝を社会に広く伝えていくため、「水をたべるレストラン」という統一コンセプトを掲げて活動を展開している。これは、「生産活動や適切な雇用創出、起業、創造性及びイノベーションを支援する開発重視型の政策を促進するとともに、金融サービスへのアクセス改善などを通じて中小零細企業の設立や成長を奨励する」に寄与する取組である。

平成29年（2017年）8月1日、市街地から車で20分離れた下打波集落の古民家で「一夜限りのレストラン 打波古民家の夜」が開かれた。食や水に関する有識者のみにゲストを限定して実施したこの取組を通じて、会場設営から地元食材にこだわった料理の数々、当日の接客等におけるおもてなしにおけるすべてを担った大野を愛する若い市民有志チーム「ミズカラ」立ち上げのきっかけとなった。



「大野在来そば」「米」「醤油」「でっち羊かん」など、水にまつわる商品をブランディングし、新商品の開発や販路開拓といった事業者の活動促進や事業者間の連携による取組を支援するとともに、「ミズカラ」メンバーをはじめ市民が参画したイベントを開催することで、ブランド価値を守りつつ官民一体で「稼ぐ力」につなげていく。

「水をたべるレストラン」コンセプト

越前そばの、軽やかな香り。日本酒の、芳醇な風味。お米のつやに、和菓子の甘み。このまちの「おいしい」は、みんな大野の水生まれ。

山に囲まれた豪雪地帯の大野市は、雪どけ水をたっぷりとたたえ、豊かな水環境が息づく、「天然の水がめ」です。

農林業・発酵業など、このまち独自の営みは、水と共に生きる知恵と、水への感謝によって育まれてきました。

④水の豊かさの土台となる水環境の保全、継承

【ゴール12 ターゲット12.8】



貴重な水環境・湧水文化を後世に伝えていくことは、CWPの取組の土台である。現在、世界全体で約1割の人が、安全な飲料水を継続して利用できない状況にある。

湧水の源である森林の保全や、地下水位を保つための湛水事業などを進めていくことは、「2030年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする」に寄与する取組である。

平成28年（2016年）1月、水環境の保全と改善に寄与する事業や水への感謝の思いを醸成する事業などを行う「一般財団法人水への恩返し財団」を設立。市民の協力を得て、市内の水田約30ヘクタールをお借りして冬季に水を張り地下水の涵養を図る活動や、越前おおのエコフィールドにおいてドングリなどの苗木を育成し、山へ植林する森づくり活動などを展開している。

幼少期から行われている食育活動、小中学校での総合学習における水に関する活動をはじめとする地下水教育、地域ぐるみでの保全活動などを通じて、市民一人ひとりの自主的な地下水保全の取組につなげていくとともに、水の研究拠点を整備して国内外の研究者などを招致して研究活動を促進し、継続的に行う保全活動に外部からの評価を得ることで、市民の自信と誇りの醸成を図る。



⑤水の豊かさを官民連携で推進、賛同の輪の拡大

【ゴール11 ターゲット11.4】

【ゴール17 ターゲット17.17】



水に対する市民の意識をさらに高めるとともに、「水への恩返し」の理念に賛同いただける企業、大学などと連携した取組を進めることで、国内の仲間を増やし、活動の継続・発展を図る。これは、「さまざまなパートナーシップの経験や資源戦略を基にした、効果的な公的、官民、市民社会のパートナーシップを奨励・推進する」に寄与する取組である。

環境省が進める「Water Project」と連携して、水の取組を進める参加企業に積極的に連携を呼びかけ「水への恩返しサポーター」として共同活動を行っている。第1回「ジャパンSDGsアワード」においてSDGsパートナーシップ賞（特別賞）を受賞した株式会社伊藤園との連携では、平成29年（2017年）12月開催の地方創生フォーラム「まちてん」へ招待を受け、市長自ら当市の取組を発信したほか、翌月には常務執行役員である笹谷氏に市幹部、職員向けにSDGsの重要性、17のゴールという世界共通の言語を用いた分かりやすい発信の大切さなどを講演いただき、機運醸成を図っている。

また、日本経済新聞に掲載した『「水の日」なんか、いらぬ世界にしよう』という意見広告が、日経広告賞の環境部門最優秀賞・環境大臣賞を受賞したことで賛同した企業との連携が始まったほか、当市での暮らしや、若者が活躍する地域づくりに関心をもつ首都圏在住の方を対象とし、「水」を切り口として連続セミナーを開講し、関係人口の増加を図るとともに、将来的な移住者の確保にも繋げていく取組にも着手した。

日仏両政府が締結した「低炭素で環境にやさしい社会を構築するための二国間連携に関する協力覚書」に基づく自治体連携の事例となる取組を推進するため、平成29年（2017年）11月、フランス環境移行・連帯省からのオファーを踏まえ、フランスの政府機関や自治体における水のブランド化、水資源の管理及び水を通じた社会貢献に関する取組の調査や意見交換のため訪仏した。翌年（2018年）3月、エロー・地中海都市圏共同体と「水問題における協力に関する覚書」を締結し、水の先進地フランスとの文化・教育など多面的な交流への展開を模索していく。

さらに、同月にブラジルで開催された「第8回世界水フォーラム」に初めて参加した。今回のテーマ「Sharing Water」は当市の進める「結」に

通じるものであり、フォーラムで「ともに活動する仲間の募集」を宣言し、今後の世界へ広げる活動につなげていく。

今後もCWPを中心とした活動を持続可能なものとするため、官民連携による各種取組を加速していくこととしている。

(2) 情報発信・普及啓発、自治体SDGsモデル事業の普及展開

(自治体SDGsの情報発信・普及啓発)

過去の地下水枯渇の危機を乗り越え、40年以上にわたり受け継がれてきた地下水保全の活動が、大野市SDGsの推進により、世界共通の言語「ゴール6；安全な水とトイレを世界中に」をはじめとする各種ゴールに資する活動であることを講座やイベント等で普及啓発する。

市民が、あたりまえではなくありがたい水の豊かさを改めて実感することで、まちに対する「自信と誇り」を醸成しつつ、保全活動の継続的な取組につなげていく。

また、全庁体制で取り組むことを宣言するため、平成30年（2018年）1月30日の庁議（市長をトップとする意思決定機関）において「大野市SDGs推進体制」を構築した。各部署において「大野市はSDGs（持続可能な開発目標）推進に取り組みます」と明記したSDGsのロゴを掲示するとともに、当市の最上位計画である「第五次大野市総合計画」後期基本計画（平成28年度～32年度）において、17のゴールとの関連性を整理し、今後の業務遂行にあたることで、大野市SDGsの取組を普及していく。

さらに、水に対する取組が広がりつつある中、寄付行為など単なる社会貢献活動にとどまらず、新たなビジネスチャンスとなる取組を促進していくことで持続可能な取組につなげていく。CWPを通じて「水をたべるレストラン」に関わる事業者への支援や、増加しているサポーター企業による新たな事業展開の支援、大野市SDGsの取組と連動させてサポーター企業と地元企業による連携した取組などを支援していく。

(自治体SDGsモデル事業の普及展開)

平成30年（2018年）2月、今後5年間のブランドの方向性を定めた「越前おおのブランド戦略」を改訂し、公表した。ブランド化する各分野を横断する視点の一つに「水を通じたブランディング」を加えており、当市と関わりを持つ研究機関、企業、事業者を誘致していく活動やメディアと連携したPR戦略の取組につなげていく。

③ 自治体SDGsの取組実施可能性

(1) 各種計画への反映

※総合計画、地方版総合戦略、環境基本計画、その他の各種計画

1. 第五次大野市総合計画（後期基本計画）

当市の最上位計画であり、計画期間は平成28年度から平成32年度の5年間。将来像『ひかりかがやき、たくましく、心ふれあうまち』を掲げ、構想実現のための4つの柱「人が元気」「産業が元気」「自然が元気」「行財政改革」と38の基本施策に基づき、各種施策を推進している。

38の基本施策すべてがSDGs17のゴールに合致した取組であることを念頭においた業務遂行はすでに実施しており、今後は、改訂に向けた議論の中で大野市SDGsの取組推進とともに、計画への反映を検討していく。

2. 大野市総合戦略

当市の地方創生の取組を人口減少対策に主眼をおいて策定したもので、計画期間は平成27年度から平成31年度までの5年間。「安定した雇用を創出する」「新しいひとの流れをつくる」「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」「時代に合った地域をつくり、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する」の4つの方向性に基づき、各種施策を推進している。

すべての取組は、人口減少時代において持続可能なまちづくりを推進するものであり、SDGsの理念に合致することから、将来ビジョンに基づく大野市SDGs推進計画を策定していく中で、大野市総合戦略の位置付けを検討していく。

3. 越前おおの環境基本計画

大野市環境基本条例第9条に基づく、環境の保全及び創造に関する総合的・計画的指針として策定したもので、計画期間は平成22年度から平成31年度までの10年間としている。第五次大野市総合計画の改訂に併せて行うこととしており、総合計画における大野市SDGsの推進との整合を図り、越前おおの環境基本計画への反映を検討していく。

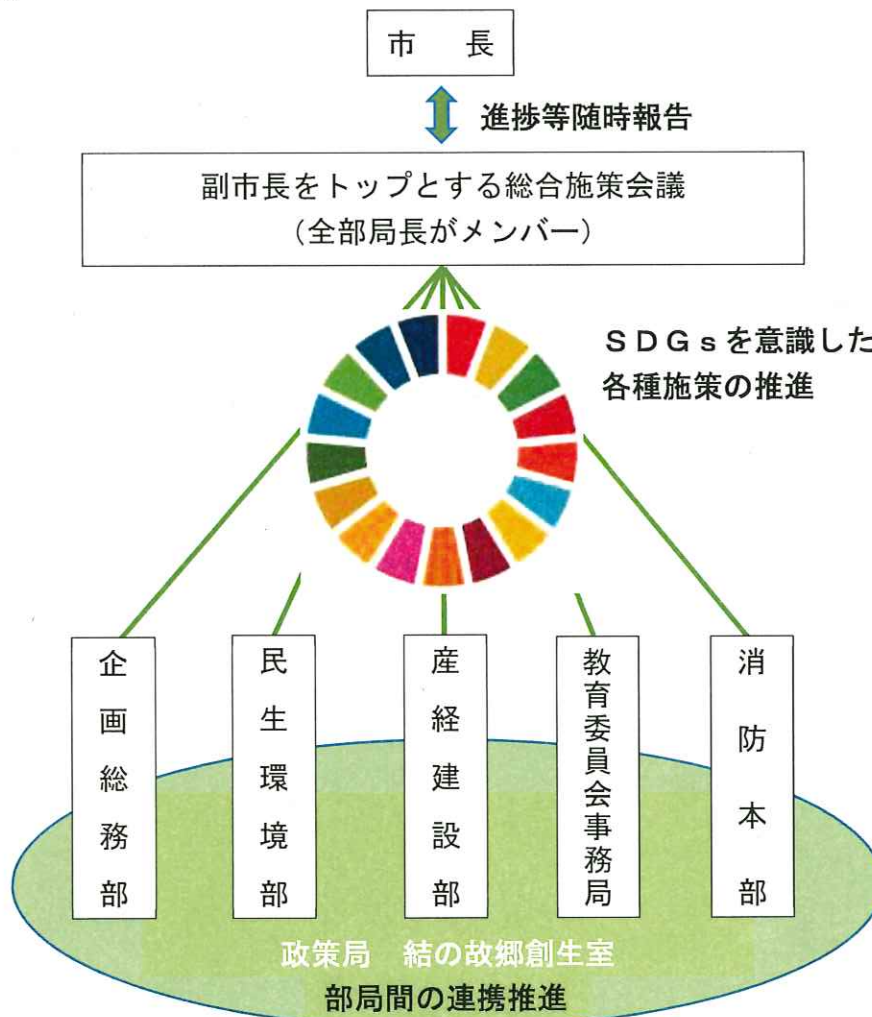
※市の上位計画への反映後は、「越前おおの水循環・湧水文化再生計画」や「越前おおの食育推進計画」など個別計画に反映させて2030年を目指す。

④ 推進体制

(1) 行政体内部の執行体制

◆大野市SDGs推進体制（平成30年1月30日庁議決定）

全庁体制で取り組むことを宣言するため、平成30年（2018年）1月30日の庁議（市長をトップとする意思決定機関）において「大野市SDGs推進体制」を構築した。各部署において「大野市はSDGs（持続可能な開発目標）推進に取り組みます」と明記したSDGsのロゴを掲示するとともに、当市の最上位計画である「第五次大野市総合計画」後期基本計画（平成28年度～32年度）において、17のゴールとの関連性を整理し、今後の業務遂行にあたることで、大野市SDGsの取組を普及していく。



(2)域内の連携

1. 企業・金融機関との連携

グローバルな水問題への貢献として始まった東ティモール民主共和国への支援に対し、市内220カ所に及ぶ募金箱の設置が行われているが、飲食業や小売業など水関連の事業者だけにとどまらず、銀行、スポーツ用品店、大型家電・量販店、自動車学校など、CWPの趣旨に賛同し、多岐にわたり設置いただいている。

合わせて、水をたべるレストランの統一コンセプトに沿った「食」のブランディングに、飲食業や小売業中心に連携した取組をいただいているほか、『水の本』増刷にかかる費用の一部を支援する動きなど、連携した取組が始まっている。

2. 市民、NPO等団体との連携

本願清水の保全活動に取り組む「イトヨの会」や御清水周辺に住む住民による清掃活動など、湧水地周辺での保全活動は活発にかつ継続して行われてきた。そういった団体等の自主的な活動は広報などにより連携した支援を行っている。

近年は、市民が多数参加する「越前大野名水マラソン」において、走った距離に応じて水への支援を行うことをランナーに周知して募金を募る「越前大野名水マラソン実行委員会」の取組や、CWPの活動を契機に立ち上がった「ミズカラ」、東ティモール特産コーヒー豆のフェアトレードによる購入と提供による慈善活動に取り組む「CROP」など、単なる環境面だけではなく社会面、経済面をも考慮した、市民団体による活動も活発に行われてきており、さまざまな活動を通じて連携していくこととしている。

(3)自治体間の連携(国内)

1. 滋賀県

「世界水フォーラム」参加をきっかけに、水政策部局との意見交換を実施し、「水」を切り口に、連携した取組を模索している。

2. 岩手県大槌町

希少魚「陸封型イトヨ」の保護活動で縁のある岩手県大槌町とは、平成23年(2011年)3月に発生した東日本大震災の復興支援を行うとともに

に、保全活動の取組を市民講座で紹介するなど、連携を図っている。

3. 福井県勝山市、永平寺町

九頭竜川の流域自治体である、勝山市や永平寺町と広域的な観光誘客で連携した取組を行っている。

(4)国際的な連携

1. 東ティモール民主共和国

水供給施設の設置支援と整備した水道施設の維持管理にかかるノウハウの提供や技術支援、人材育成をはじめとした各種施策を展開するほか、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとして選定されたことを契機とした市民レベルでの交流を進めていく。

2. フランス

エロー・地中海都市圏共同体と「水問題における協力に関する覚書」を締結し、水の先進地フランスとの文化・教育など多面的な交流への展開を模索していく。

※世界水フォーラム参加国

第8回世界水フォーラムでの「ともに活動する仲間の募集」宣言により、反応のあった国との連携を模索していく。

2 自治体SDGsモデル事業(特に注力する先導的取組)

① 自治体SDGsモデル事業での取組提案

(1) 課題・目標設定と取組の概要

(アピールポイント)

「水への恩返し」新たなフェーズへ!

「水への恩返し」の取組は、単なる「名水のまち」としての取組ではなく、異なる政策課題に同時に取り組む大野ならではの地方創生のカタチである。大野市SDGsを推進する中で「水への恩返し」の取組を進めることは、共通の課題・テーマを掲げて取り組む国際都市との交流や「水への恩返しサポーター」との連携した活動を活発にかつ明確な目標に向かって実施する道しるべになる。

これらの取組を軸に多分野の施策を組み合わせることで、大野人の自信と誇りの醸成につなげ、限りある水資源を守り続ける「水の聖地」として持続可能なまちを形成していく。今までの取組では、「水への恩返し」の理念を構築し、『水の本』や「水をたべるレストラン」といった具体的なプロジェクトを確立してきた。そして、この理念やプロジェクトを広く発信することで、賛同する企業や個人といった関係人口を増加できたことは誇るべき成果であり、今後もしっかりと継続して取り組んでいくこととしている。

一方で、この高い理念がまだまだ市民に浸透しきっていないとは言えず、人口減少という課題を抱える当市の将来を考えると、更なる関係人口の拡大を図り、市民の理解、あるいは事業への参画を促す必要がある。共通言語であるSDGsのゴールに向かって取り組むことで、いかに市民へ浸透させるかがポイントであり、当市におけるSDGsの普及は、「水への恩返し」の普及であると言える。

新たなフェーズでは、この浸透に力を入れ、賛同者の拡大や寄付の増加を通じて活動自体を自立し持続可能なものとする。

そのため、以下のゴール、ターゲット達成に向けて特に注力して取組を加速させ、「水への恩返し」を普及していく。

(課題・目標設定)

【ゴール6 ターゲット6.5】

【ゴール8 ターゲット8.3】

【ゴール12 ターゲット12.8】

【ゴール17 ターゲット17.17】

(特に注力する目標)



(取組の概要)

「水への恩返し」に資する取組を総合的に実施するとともに、経済、社会、環境の三側面をつなぐモデル事業を展開することで、大野市SDGsの推進を図る。

①水を通じて世界に結を広げる活動

- ・東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンとして選定されたことを契機とした東ティモール民主共和国との市民レベルでの交流。
- ・JICAやJSTと連携した人材育成などの取組の実施。

②研究拠点や「水の本」活用による「水のがっこう」

- ・全国からの要望に応じた出張授業の実施。
- ・整備される研究拠点における国内外研究者招致、大学等との共同研究による水の知見集約とアーカイブ化。
- ・研究論文や水の本、各種媒体の翻訳による、全世界に向けた情報ネットワークの構築。

③稼ぐ力をつける「水をたべるレストラン」の展開

- ・事業のグランドデザインを再構築し、民間事業者が自主的に参画し取扱商品のラインナップ拡張などに取組める仕組みを構築。
- ・市民団体等が自ら各種イベントに参加し、直接五感に訴える魅力の

発信を実施。

④水環境の保全・継承

- ・ 幼少期から行われている食育活動、小中学校での総合学習における水に関する活動をはじめとする地下水教育の推進。
- ・ 地域ぐるみでの保全活動推進。

⑤賛同の輪の拡大と情報発信

- ・ 水への恩返しパートナー拡大に向けた啓発とパートナー企業・団体との連携した活動の推進。
- ・ 水の先進地フランスのエロー・地中海都市圏共同体と締結した覚書に基づく、文化・教育など多面的な交流への展開。
- ・ 世界水フォーラムにおける発表を機に、世界各都市・機関との連携による活動の実施。
- ・ 専用WEBサイトの充実や各種広告媒体の活用による発信の強化。

(2-1) 経済面の取組

(KPI) 当市における観光消費額 (日帰り)

2,547円 (2016年度) → 4,500円 (2020年度)

(事業費) 3年間 (2018~2020年度) 総額: 294,552千円 (概算)

(取組概要)

- 市民総参加・市民協働で開催する福井しあわせ元気国体・大会及び東京オリンピック・パラリンピックに向けて、当市の魅力ある地域資源を発信することで、インバウンドを含む交流人口の拡大による地域経済の活性化を図る。
- 伝統的な食文化の伝承など、地域の食を守り育てる活動、ブランド化に向けた取組を促進する。【地方創生推進交付金活用予定】
- 民間事業者が自主的に参画し自走できる「水をたべるレストラン」ブランドデザインの再構築や取扱商品のラインナップ拡張など、「稼ぐ力」向上に資する取組を支援する。【地方創生推進交付金活用予定】

(2-2) 社会面の取組

(KPI) 当市をフィールドに「水環境」の研究を進める機関・大学等 (累計)
8団体 (2017年度) → 14団体 (2020年度)

(事業費) 3年間(2018~2020年度)総額:1,400,495千円

(取組概要)

- 健康で元気な大野人を育成することは、すべての活動の基本であり、関係機関と連携してスポーツ活動を推進することで、青少年の健全育成や地域コミュニティの醸成を図る。
- 九頭竜川の源流に位置する本市と下流域の自治体や、姉妹都市など自治体間の連携した観光を中心とした産業育成を支援することで、持続可能なまちづくりにつなげる。【地方創生推進交付金活用予定】
- 水の研究拠点における国内外研究者の招致や大学等との共同研究、水の知見が集約された研究論文などの多言語化を通じて、水の聖地としての知見のアーカイブ化、全世界との情報ネットワークを構築する。【地方創生推進交付金活用予定】
- 行政と市民・団体との協働により、集約した知見を高度な研究に役立つものにして人を引き付け、若い研究者などとの交流を通じて、市民が新しい側面から大野のことを知るとともに、自分たちを見つめなおす機会をつくり活力につなげていく。

(2-3)環境面の取組

(KPI) 名水百選「御清水」観測井における11月の平均地下水位

1. 20メートル未満の維持(※参考 2017年は0.9メートル)

(事業費) 3年間(2018~2020年度)総額:4,001,169千円

(取組概要)

- 自然の恵みに感謝する一方、いつ起こるか分からない自然災害の脅威に対応する地域防災力の強化や、水道など生活基盤の整備を進めることで減災体制の整備促進を図り、安全で安心なまちづくりを推進する。
- 平成30年(2018年)3月に運用を開始した「大野市立地適正化計画」に基づき、中心拠点、地域生活拠点、中部縦貫自動車道・大野東IC(仮称)隣接地に整備する重点道の駅「(仮称)結の故郷」周辺の広域連携拠点の3拠点の機能維持と、その各拠点を結ぶ公共交通軸の整備や自転車を活用したまちづくりを推進することで、環境負荷の少ない維持管理コストに配慮した機能集約型のまちを目指す。
- 企業や団体、関係機関などと連携して地下水保全や湧水文化再生の取組を推進し、実効性のある持続可能な大野ならではの保全活動につなげることで、大野市SDGsや水への恩返し理念を浸透させていく。
- 狩猟の適正化のもとで、鳥獣の保護及び管理を行い、生物の多様性の確

<p>保、生活環境の保全及び農林水産業の健全な発展に寄与する取組を通じて、自然環境の恵沢を享受できる環境の維持につなげる。</p> <p>○市民一人一人が、地下水は限りある貴重な資源であることを再認識するため、食育活動や総合学習の時間、生涯教育などの機会を提供するとともに、後世に受け継いでいくことで、豊かな水環境の維持につなげる。</p>
<p>(3-1)三側面をつなぐ統合的取組 (自治体SDGs補助金対象事業)</p>
<p>(事業費) 3年間(2018~2020年度)総額:1,147,075千円</p> <p>(取組概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 水をはじめさまざまな地域資源を磨き上げ、ブランド化することで、経済成長と持続可能な生産消費のサイクルを確立する。 ✓ 研究機関、企業、事業者など、外部との関わりによる関係人口を増やしつつ、当市への誘致を推進することで、将来的な定住につながる人材を育成するとともに、継続的に行う保全活動に対してより一層の外部からの評価を得る。
<p>(3-2)三側面をつなぐ統合的取組による相乗効果(新たに創出される価値)</p>
<p>(3-2-1)経済⇄環境</p>
<p>(経済→環境)</p> <p>(概要)</p> <p>三側面をつなぐ統合的取組により、経済面においては、都市部の住民に田植え・収穫体験を提供する企業の進出など、当市をフィールドに活動することによるファン拡大・来訪者が増加し、環境面において、良質な農地が引き続き保全されるという相乗効果が期待される。</p> <p>(KPI)</p> <p>食品安全等の持続可能性を確保するための生産工程管理「GAP」(Good Agricultural Practice:農業生産工程管理)の取組推進に向けて、県が導入しているGH評価制度による農場評価を受けた経営体数(累計)</p> <p>18経営体(2017年度)→50経営体(2020年度)</p>

(環境→経済)

(概要)

三側面をつなぐ統合的取組により、環境面においては、当市の恵まれた水環境を守り育てる市民・団体の増加が見込まれ、経済面において当市の恵まれた水環境で育った農林産物などを活用した商品提供による消費拡大という相乗効果が期待される。

(KPI) 大野産農林産物を使用した加工商品の開発品目数 (累計)

15品目 (2017年度) → 21品目 (2020年度)

(3-2-2) 経済⇄社会

(経済→社会)

(概要)

三側面をつなぐ統合的取組により、経済面においては、福井しあわせ元気国体・大会、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、当市の魅力ある地域資源を発信することで、インバウンドを含む交流人口の拡大により地域経済が活性化し、社会面において、地域資源の発信や交流人口の増加がきっかけで、水の研究フィールドとして当市を選ぶ新たな国内外研究者の招致や大学等との共同研究が促進される相乗効果が期待される。

(KPI)

「水への恩返し」活動の趣旨に賛同し、寄附や連携した取組を行うパートナー企業・団体数 (累計)

78団体 (2017年度) → 90団体 (2020年度)

(社会→経済)

(概要)

三側面をつなぐ統合的取組により、社会面において国内外研究者や大学等との共同研究により水の知見の集約が進み、情報ネットワークが構築されて関係人口が増加することで、当市の水に対する価値観が向上し、経済面において「水をたべるレストラン」商品の付加価値向上による消費の拡

大が、市民所得向上や事業者数の維持につながる相乗効果が期待される。

(K P I)

「水をたべるレストラン」連携事業者数 (累計)

19社 (2017年度) → 30社 (2020年度)

(3-2-3) 社会⇄環境

(社会→環境)

(概要)

三側面をつなぐ統合的取組により、社会面においては、当市の事例を含む世界の水環境を学ぶ人材が育成され、環境面において地下水保全の取組が推進される相乗効果が期待される。

(K P I)

名水百選「御清水」を大野市の誇り・象徴と考える市民の割合

86.4% (2014年度) → 90.0% (2020年度)

(環境→社会)

(概要)

三側面をつなぐ統合的取組により、環境面においては、地下水保全活動の促進や募金活動が促進され、社会面において地下水保全基金を活用した活動の増加といった相乗効果が期待される。

(K P I)

地下水保全 (大野市地下水保全基金を含む) への年間寄附額

1,381千円 (2017年度) → 2,000千円 (2020年度)

(4) 自律的好循環

人口3万人の小規模都市であっても、「水」という地域資源による国際貢献や研究フィールドとしての活用など、外部との関わりによる関係人口の増加や水の知見の集約を進めることで、外部から好評価を受けている。共通言語であるSDGsを活用して市民へさらに周知・浸透させ、市民の

自信と誇りの醸成につなげる。

大野に住む市民が自信を持つことで、市民・団体との協働による自主的なまちづくり活動の展開とともに、その魅力に惹かれた企業などの誘致が進み、地下水を守り育てる定住人口の増加につながり、「水の聖地」としての持続可能なまちの形成につながる。

(5) 多様なステークホルダーとの連携

(全体方針・マネジメント)

当市の取組への賛同者を「水への恩返しパートナー」と位置付けて連携することで、事業の継続した実施と発展、恵まれた水環境の保全活動、人材育成や地域の「稼ぐ力」向上などにつなげる。

また、当市の恵まれた水環境を後世に残すことを目的に、水環境の保全と改善に寄与する事業や水への感謝の思いを醸成する事業を実施する「一般財団法人水への恩返し財団」が主体となり連携強化に努める。

(経済面での連携)

事業に協力するスポンサー企業（下記）や当市を応援してくれる各都市圏大野会や全国の大野ファンなどと連携し、地元事業者の「稼ぐ力」向上と地域活動の継続につなげる。

○スポンサー企業一覧<順不同>（株式会社ネピア、株式会社伊藤園、株式会社モンベル、株式会社ミツカン、株式会社クボタ）

(社会面での連携)

安全な水が供給されていない地域への支援や、世界の水環境を学ぶ人材の育成といった教育面で連携することにより、当市の社会的な立ち位置を確立し、市民・団体などが自主的に活動し続けることができるまちの基礎を築く。

【現在の連携企業・団体一覧<順不同>】

○関係人口の発掘支援（株式会社木楽舎ソトコト編集部、シーズ総合政策研究所）

○「水の本」増刷支援（株式会社日水コン、月島テクノメンテサービス株式会社、メタウォーター）

○東ティモール支援（株式会社神鋼環境ソリューション、ウォーターエージェンシー、市内協力企業・事業所）、

○活動組織（CROP・ミズカラ）、全国の小中学校、フランス政府

(環境面での連携)

水環境の保全活動に取り組む企業や団体と積極的に連携することで、恵まれた水環境を後世に残す。

【現在の連携企業・団体一覧<順不同>】

- 水の知見の集約（総合地球環境学研究所、筑波大学、早稲田大学、香川大学、日本大学、石川県立大学、岡山大学、岐阜経済大学森誠一教授、京都大学角哲也教授、大阪府立大学遠藤崇浩准教授）
- 地下水保全基金寄付企業（株式会社ニチコン、福井コンピューター）
- 越前おおのエコフィールド管理・運営協議会（NTT西日本福井支店、九頭竜森林組合、福井新聞社、福井放送、北陸電力(株)福井支店、越前信用金庫、大野鉄工金属協同組合、大野市消防団、越前おおの森づくりネットワーク、北陸銀行大野支店、中日本ハイウェイ・エンジニアリング名古屋、タニコーテック、越前大野駅、大野市内郵便局、日本たばこ産業(株)福井営業所、大野商工会議所、森永乳業(株)北陸支店福井営業所、J-POWERグループ九頭竜、福井銀行大野支店、福邦銀行大野支店、ハニー新鮮館、九頭竜川ダム統管理事務所、大野青年会議所、福井県奥越農林総合事務所、福井県奥越土木事務所、ブルーシー・アンド・グリーンランド財団、住友林業(株)住宅事業本部福井支店、福井グリーンパワー、大野市教育委員会、大野市、一般財団法人越前おおの農林楽舎、一般財団法人水への恩返し財団)

(6)資金スキーム

(総事業費)

3年間（2018～2020年度）総額：6,843,291千円

(千円)

	経済面の取組	社会面の取組	環境面の取組	三側面をつなぐ統合的取組	計
2018年度	105,336	258,471	1,342,305	604,895	2,311,007
2019年度	96,958	324,589	1,333,222	279,910	2,034,679
2020年度	92,258	817,435	1,325,642	262,270	2,497,605
計	294,552	1,400,495	4,001,169	1,147,075	6,843,291

(活用予定の支援施策)			
支援施策の名称	活用予定年度	活用予定額 (千円)	活用予定の取組の概要
地方創生推進交付金 【内閣府】	2018～	72,800	地域資源の磨き上げや稼ぐ力向上に資する取組への支援
生活基盤施設耐震化等 交付金【厚生労働省】	2018～	73,900	水道施設の整備
環境保全型農業直接支 払交付金【農林水産省】	2018～	22,500	環境に配慮した農業の推進
社会資本整備総合交付 金【国土交通省】	2018～	1,595,420	社会基盤の整備
(民間投資等)			
<p>地域資源を磨き上げ、ブランド化することと、当市と関わりを持つ研究機関、企業、事業者を増やし、当市への誘致を推進することを通じて、民間投資を呼び込む。</p>			
(7)取組全体のスケジュール			
<p>2018年度：水の研究拠点整備と国際貢献、教材を活用した人材の育成 <市民への事業理念、事業成果の浸透></p> <p>2019年度：水の研究拠点における知見の集約、成果の見える化検討 <市民との協働による新たな活動への展開></p> <p>2020年度：研究成果の対外発信と人材交流の活発化 <市民活動団体の自立による持続可能性の検証></p>			

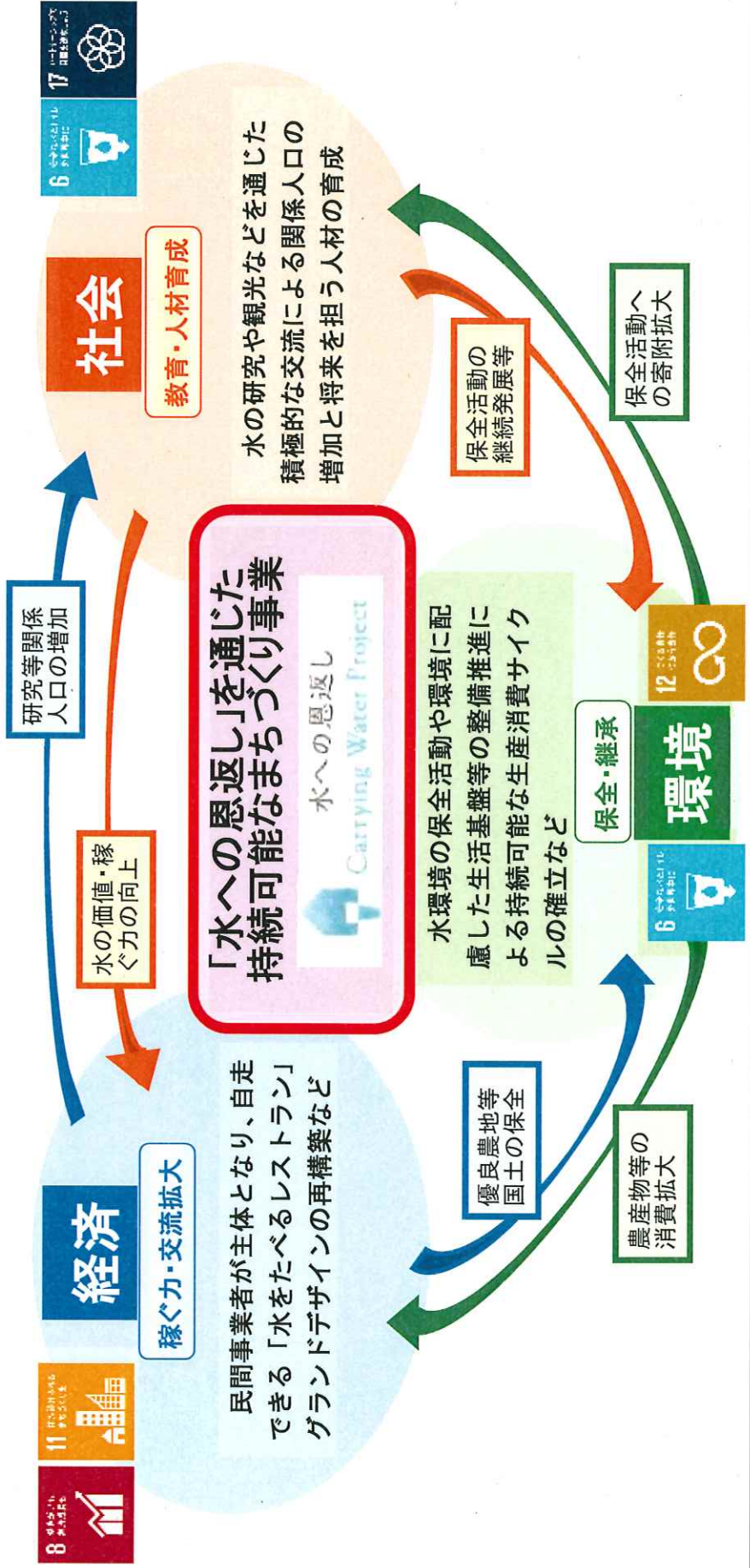
取組内容の概要

2030年のあるべき姿

水に関係する国内外の多様なパートナーと連携した活動による新たなまちづくりの展開と、それを支える結の心あふれる大野市の育成により、水の聖地として「福井県大野市」が認知され、日本の豊かな国土の保全と持続可能なまちを指す。

三側面をつなぐ統合的取組

- ✓ 水をはじめさまざまな地域資源を磨き上げ、ブランド化することで、経済成長と持続可能な生産消費のサイクルを確立する。
- ✓ 研究機関、企業、事業者など、外部との関わりによる関係人口を増やしつつ、当市への誘致を推進することで、将来的な定住につながる人材を育成するとともに、継続的に行う保全活動に対してより一層の外部からの評価を得る。



SDGs 未来都市等提案書添付

参考資料一覧【福井県大野市】

1. 平成29年8月 1日 日本経済新聞掲載広告
2. 平成30年3月22日 日本経済新聞掲載広告
3. 平成30年3月第8回世界水フォーラム発表資料
4. 水への恩返し（CWP）の取組概要



「水の日」なんか、
いらぬ世界にしよう。



福井県大野市。

類い稀なる水循環を蘇らせた
湧水のまちから世界へ、
「水への恩返し」。

水は、永遠ではないことを、
このまちは知っています。

四十年前、まちを襲った深刻な井戸枯れ
市民一体となった保全活動で
ふたたび地下水を取り戻したとき、
まちに湧いてきたのは、
水への感謝でした。

いまこのまちは、子どもたちに
水の大切さを伝える。

副読本「水の本」の展開をはじめ、

水循環や湧水文化を題材にした
大学・企業との協働研究、

さらには、安全な水に恵まれていない国、
東ティモールへの水支援など、

つながり、分かちあい、助けあうことで、
世界の水の未来を拓くまちへと

歩んでいます。

湧水を守り、育むことが、
暮らしたともある福井県大野市から、

「だれもが、いつでも

水のありがたさを感じられる世界へ」。
水の箱庭のような、小さなまちの
「水への恩返し」はつづきます。

いつか「水の日」が必要なくなる日まで。



大野から世界へ、水への恩返し。きょう、8月1日は「水の日」です。

福井県大野市



水への恩返し
Carrying Water Project
www.carrying-water-project.jp



今日は世界と、 井戸端会議。

◆ FRANCE

ONO ◆

TIMOR-LESTE ◆

BRAZIL ◆



安全な水の確保が難しい東ティモール民主共和国と手を結び、ユニセフ(国連児童基金)を通じて給水施設の建設を支援



フランスの広域行政組織と、世界に広がる水問題の解決に向けた覚悟を締結

その想いは今、「水への恩返し」として、
まちを飛び出し、日本を飛び出し、世界に広がっています。
大野市は今日、ブラジルで開催される国際会議
「世界水フォーラム」に参加します。
かつて大野市民が集い、話し合い、困難を乗り越えたあの時のように、
世界中の人々との「井戸端会議」で、
「水への恩返し」を世界とともに進めるための提言を行います。

豊かな湧水に恵まれ、
名水のまちとして知られる
大野市では、約四十年前、
地下水の使いすぎによって
深刻な井戸枯れが発生、
宝物である
「水」を失いかけたことが
ありました。
懸命な保全活動によって
ようやく湧水が
戻ってきたとき、市民たちは、
水への感謝を込めて、
自分たちの経験を世界中の
人々のために役立てたいと
願うようになりました。



福井県大野市。
水で未来を拓くまちから、
世界に伝えたいことがあります。

The challenge to share

Gratitude for water

From Ono to Timor-Leste, France and all over the world !

Yosuke Kon/ONO-City, Japan



○ 日本の大野というまちで副市長をしている今と申します。

Thanks for you kind introduction, everyone gathered here today for your warm welcome. Good afternoon ladies and gentlemen, I'm Yosuke KON, the Vice Mayor of Ono City, Fukui Prefecture, Japan.



○ 大野は、水問題の改善に貢献するため、世界に向けて「水への恩返し」という取組を進めています。本日は、皆さんにこのスキームを紹介し、一緒に取組を進めてくれる仲間を募集するために、やってきました。

It is my great honor to have this opportunity to present you Ono's a concerted an effort which is called "the Gratitude for Water" campaign, aiming to address water related issues in the world. The city hopes that this Gratitude for Water" campaign will be widely shared and promoted around the world. Today I hope to showcase Ono's approach and to attract new partners who wish to join our endeavor.



○ 私たちが取り組んでいる「水への恩返し」は、いわゆる水ビジネスではありません。大野には大きな水関連企業は一つも無いですし、大野市自体も人口約3万人強の、日本においては小さな自治体であり、自ら水関連の技術売り込むような体力もありません。また、先進国から途上国へという、一方通行の「国際支援」とも一線を画すものです。

First and foremost, I would like to note that our activity is not a business for the purpose of profit. The city of Ono has not even a single water-related enterprise. What is more, as Ono is a relatively small municipality in Japan with a population touching over 30,000, the city is not equipped with the energy to market its water expertise. Furthermore, it is not approach for a one-way international cooperation from developed countries to developing countries.

○ この「水への恩返し」は、ある意味極めて日本的な、農村地域である大野に昔から根付いている助け合いや分かち合いの心に沿って、世界の人たちとも助け合いたいという気持ちが自然に湧き上がってくることから、それに基づき始まった取組です。

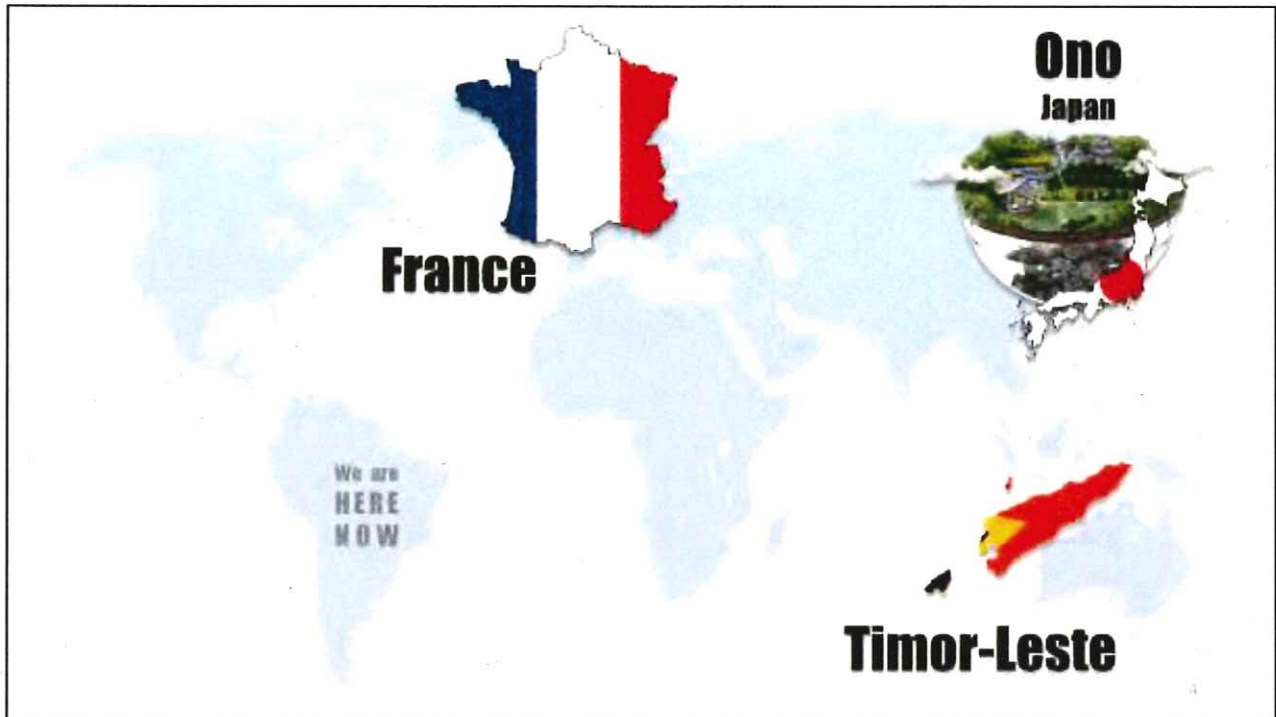
The fact is that this activity is derived from a Japanese ancient value of caring, helping and respecting each other, and that is deeply rooted in particular in rural farming communities like Ono. We hope “the Gratitude for Water” will encourage such value to be inherited in all the people in the world.

○ このような互いに助け合い、分かち合い、思い合う精神は、日本では「結」と呼ばれています。農耕文化が中心であった我が国において、古来から人々の暮らしに深く根付き、行動を規定してきたものです。現代では社会から失われつつあるこの「結」ですが、大野においてはいまだに人々の暮らしに息づいており、その価値を日本社会に、さらには世界に向けて広めていくことが私たちの役割だと考えています。

So, the value of caring and respecting each other is very important to create a spirit of togetherness, and we call it in Japanese “Yui” Spirit. When we look at the agriculture history in Japan, our ancestors, mostly farmers, worked together very hard, cultivating and harvesting crops and products. This is very much about “Yui” spirit, and was essential for them to survive. Unfortunately, I have to admit that today Yui spirit has not maintained so much as it should have, but in Ono, we are very proud that our “Yui” spirit is surviving. So our role is to encourage its value to be maintained to attain our ultimate objectives of solving water problems the world has faced.

○ そして、この「結」の心に基づいた、損得勘定を抜きにした自然な助け合いという行動は、水という大きな分野においても、これまで世界で行われてきたアプローチではカバーしきれなかった部分への、一つの処方箋になりうるのではないかと、という思いで、この世界水フォーラムで紹介させていただきます。

So, I’m optimistic about what we have in front of us with Yui spirit, as we believe Yui could be a “game changer” in a way that it will have a positive impact on global efforts to solve the water problems. I am so excited about presenting you our vision toward Yui at this grand occasion.



○ 我々はいま、二つの国とのつながりを持ってこの取組を進めています。

We are currently engaging in two water related projects with two different countries, one is Timor Leste, another, France.

○ 最初に行ったことは、市民の力で東ティモールに協力することを通じ、水環境の向上に貢献するとともに、大野自体の水環境の維持も図るという取組です。

As for Timor Leste, with the campaign called the Carrying water project, Ono citizens have committed with the international contribution to offer a greatest opportunity for making a difference in the water environment in Timor Leste, which in turn will a positive impact on Ono citizens themselves, rising awareness about their own water preservation.

○ そして、この取組の仲間として、フランスとの連携が始まったことが、次のステップとなっています。

Our second step was to partner with France to promote further the Carrying Water Project



○ 始めに、東ティモールとのつながりについて紹介します。

First I would like to present you about our relationship with Timor-Leste.

○ 実は、大野は豊富な湧水に恵まれた街ですが、過去には枯渴を経験し、それを市民の団結で乗り越える中で、水のありがたみや大切さを身をもって経験しています。ですので、水に困っている国があれば、そこの人々の苦しみも理解できるし、結の心からすれば、困っている人を助けてあげたいという感情が自然と出てくるのです。

Ono's Yui spirit is based on what has happened in the past. Today Ono is blessed with abundance of its spring water, but it was not always the case in the past. You know what? Ono has the histories of droughts. To overcome and preserve the tradition of their water culture, Ono's citizens united with the Yui spirit. The experience of struggle reaffirmed the importance of Yui and water. This common sentiment among the citizens made them want to reach out to people who have been placed in a disadvantaged environment in terms of water resources

○ その気持ちを具現化すべく、市民が寄付金を集めて、ユニセフを經由して、アジアで一番水に困っている国である東ティモールに水道施設を作る、というプロジェクトが実現しました。ユニセフとの契約である、一年に10万ドルという金額は、人口3万人強の大野にとっては決して安い額ではありませんが、この規模の寄付がすでに2年間も達成できているのは、大野市民の結の心、そして水への思いが本物であるからです。

Taking pride in its water and Yui spirit, the city decided to partner with UNICEF to provide financial support to construct water systems in Timor Leste whose children have been placed in the most disadvantaged condition in Asian region in terms of the access to improved drinking water. As per agreement with UNICEF, Ono has

collected donation equivalent to 100,000 US dollars for the second consecutive year. That is not a small amount for such a small city like Ono, but we have conducted successful fundraising. This is the magic of "Yui" spirit. This is the magic of our pride in water culture.

○ この取り組みは、まさに市民がその結の心に基づき、水のありがたさを分かち合う(シェア)取組であり、今回のフォーラムの趣旨にもピッタリと合致する例ではないかと考えています。

I believe that the Ono's movement of the "Gratitude for water" conforms fully with this year's World Water Forum theme, "Sharing Water " And I believe that this is the special dynamic that create togetherness.



○ しかも、これは大野からの一方的な施しではありません。この取組を通じて生まれた東ティモールとの交流は、人口減少や高齢化が進み、また盆地という地形もあり内向的な性向が強い大野の市民にとっても、新たな活力や視点を獲得のかけがえの無い出会いとなっています。すなわち、大野と東ティモールとの助け合いなのです。

Now we would like to speak on a little bit background. Ono has been experiencing population decline, coupled with aging society. Having said that, associating with Timor Leste has inspired with citizens to have a more open discussion about what we need to transform the city a dynamic and vibrant, which our children desire to reside permanently.

Not all of them, but generally speaking, people in Ono have long been characterized by words such as “decreed”, “reserved”, or “modest”. So creating togetherness with Timor Leste means a lot to Ono people, giving them a consciousness about their own assets and legacy in water. This is how Ono and Timor-Leste are giving and helping each other.

○ この取組を進める中で、若い人たちが地域のことをこれまで以上に真剣に考えるようになりました。募金を集めるために東ティモールのコーヒーを売るグループを作ったり、取組を広げるために水を使った新たなお菓子を作って売り出したり、若者のチームが水をテーマにした「おもてなし」を広めたりしています。

In the context of pursuing the project, young people have started to think more seriously than ever to deal with the demographic transition and to make the correct action to revitalize our community. Various measures are currently in place to promote the movements. One group has established a new operation of a kind of cause related marketing to raise donation by selling Timor-Leste’s coffee; Others are local sweet shops that have developed new products used Ono’s clean water. and others organized events to give everyone a taste of delicious products made of

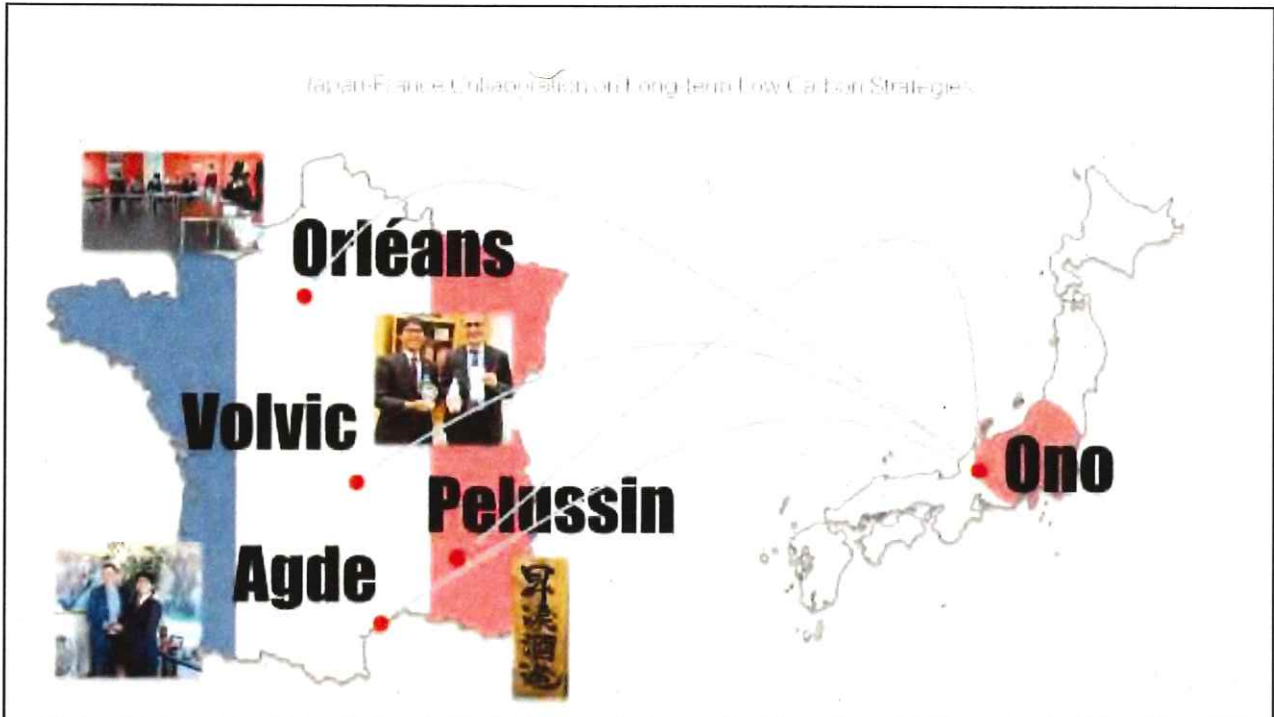
Ono's water.

○ また、東ティモールの人たちとのふれあいは、外国人がほとんど訪れない大野の市民にとってとても刺激的です。東ティモールの著名な歌手であるエゴ・レモスさんが大野の小学校で講義やコンサートを行った際には、子供たちは大喜びでした。ユニセフの支援で作った水道施設を管理するノウハウを現地に根付かせたいという市民から、現地への渡航や交流についての希望も寄せられています。

Again, contacts with Timor-Leste has been very stimulating for Ono's citizens because foreigners don't often visit Ono. When Ego Lemos, a national educational adviser and a famous Timor-Leste musician, came to Ono, to sing songs and give lectures in primary schools, children had a delightful time. Many citizens now wish to travel and exchange with people in Timor-Leste; some of them say they want to teach their technical skills of water supply management, which has historically developed in Ono, so that local people can maintain their own water supply system implemented by the partnership between Ono and UNICEF.

○ さらに、大野は2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて、東ティモールのホストタウンとして、選手団を受け入れる準備をしています。東ティモールとの交流は、今後も幅広く続き、大野と東ティモールの双方に、多くのものをもたらしてくれるでしょう。

Moreover, for the Tokyo 2020 Olympics and Paralympics Games, Ono city is preparing to host athletes from Timor-Leste. A wide variety of association with Timor-Leste will continue in the future, and I'm sure that it will bring about many benefits for both Ono and Timor-Leste.



○ この「水への恩返し」の取組を、フランス政府がを見つけ出してくれました。「水への恩返し」のもつ社会的意義を評価してくれたフランス政府の招待により、我々はフランスに赴き、水にまつわる取組を行っている自治体と対話することで、「水への恩返し」をともに行うパートナーを見つけることができました。大野のような小さな町の取組みを、フランスという水の課題における先進国の政府が直接評価してくれたことは、私たちの取組を進めていくうえで大きな自信となり、強力な後押しとなっています。

Turning now to our relationship with France, we are so proud to announce to all of you that we found a partner for promoting and spreading the idea of “Gratitude for water” through the journey to France and through discussions with local authorities heavily involved in water activities. Thanks to the Embassy of France in Tokyo and the French Ministry for an Ecological and Solidary Transition recommended us.

The fact that Ono received positive feedback from France, which has been spearheading an effort to address water issues in the world, has made us more confident in promoting our activities further.

○ フランスの自治体では、「地域分権型協力」という理念に基づき、水に関連する活動を行っていることを知りました。そしてその根底には、水を大切にする精神や、人々が助け合うという心があり、その考え方は私どもの「水への恩返し」の根底にある「結」の心と、まさしく同じものであり、一緒に取組を進めていけるという確信を得ました。

We learned that all the water related activities in France are based on the principle “decentralized cooperation” which constitute the idea of caring and respecting people on top of their precious water source. This is surprisingly akin to our philosophy of YUI spirit. So, I am convinced that our partnership with France will find a breakthrough in solving water issues on the globe.



○ その中でも、「水への恩返し」に対する最も重要な理解者の一人であり、大野にとって大切なパートナーでもあるのが、今回の世界水フォーラムにもお越しになっている、アグド市のジル・デトル市長です。アグド市では、フランス政府やユニセフ等との連携により、モロッコのタタ市に対して、上下水道の整備をはじめとしたさまざまな支援を行っています。

Now I am so honored to introduce Mr. Gilles D'ETTORE, Mayor of the city Agde as a President of Herault-mediterranean community agglomeration, a participant of the Forum today, who is the most sympathetic and has same languages with Ono when it comes to the idea of sharing “the Gratitude for Water”. We regard Mr. Gilles D'ETTORE as a precious partner for ONO. The city of Agde is currently involved in a project of the implementation of the sanitation facilities for people in Tata, Morocco with UNICEF and the Government of France.

○ この三月に、大野市とアグド市は、日仏両政府の立ち合いの下、水問題に連携して取り組むための覚書を締結しました。この枠組みに基づき、例えば大野が作成した水教育の教材「水の本」の相互活用や、アグド市が持つ、子供たちの社会課題解決への参加スキームの活用ノウハウの共有など、「水への恩返し」の活動がより幅広く、実効性が高い形で行われることが期待できるでしょう。

In March this year, in the presence of the Embassy of France and the Ministry of the Environment of Japan, Herault-mediterranean community agglomeration and Ono signed a declaration of intention to create the basis for dealing with water problems. For example, using pedagogical materials for water education or sharing with our knowhow. The partnership with Herault-mediterranean community agglomeration will give us a new insight into the promotion of our water movement in a positive manner.



○ ここで触れておかないといけないのが、「水への恩返し」の活動を支えてくれているパートナー企業の方々への感謝です。先ほど紹介した「水の本」の増刷など、活動に係る経費へのご寄付をいただいたり、各企業が持つネットワーク等を活用し「水への恩返し」の活動の周知啓発の機会をいただいたり、そのお力添えの形は多岐にわたっています。

At this point I would like to extend our deep appreciation to all the companies and organizations that have been supporting our initiative, including those who donated for the additional printing of the “Book of Water” which is previously mentioned, and to the companies helped us publicize our movement and network

○ 大野というまちの規模を考えれば、「水への恩返し」の活動を継続し、発展させていくのはとても大変な作業です。これまでも、そしてこれからも、パートナー企業の皆様のお力添えなくして、この活動を継続していくことは困難であり、より多くの方々からお力添えをいただけるよう、取り組みの社会的価値を高めていきます。

From the scale of Ono city, the continuation and development of this international activity has only become possible by the understandings and cooperations extended by our partners. The more people who join together and the more support we have, the higher we raise the projects ability to overcome social carriers.

**We can share water
share resources
share knowledge
share culture
share happiness
help each other**

It is 'YUI'

It is 'Gratitude for water' platform



○ さて、このプレゼンの最初に、今回仲間を求めてこのフォーラムに来たと申し上げました。私たち大野の市民は、この「水への恩返し」をさらに進めていくため、一緒に連携して取り組みを進めてくれる自治体や団体、また取り組みを支援してくれる企業などのパートナーを求めています。

Now, going back to the point that I made at the beginning of my speech, I have come today with an objective to seek the partners. We welcome everyone who is willing to work to promote the idea of sharing the “Gratitude for Water” with a unique and creative manner in each respective field.

○ このような関係者が、ゆくゆくは一堂に集い、水問題という世界共通の重要な課題に一丸となって取り組むような「水への恩返しプラットフォーム」を確立し、その主導的な立場として大野市も参画していきたい、というのが私たちの描く夢の一つです。

I have a dream that everyone who feels common mission and responsibility in solving world water problems will one day unite together for the establishment of a “Gratitude for Water Platform”. If that happens, Ono is willing to play a leading role in promoting and keeping the platform meaningful to the world.

○ この「水への恩返しプラットフォーム」の活動は、2030年に向けたSDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けても、特に目標6の分野において、世界が連携して取組を進めていくための素晴らしいモデルケースとなることでしょう。

And I believe that the activity of this “Gratitude for Water Platform” will become a wonderful model for achievement of the Sustainable Development Goals (SDGs) by 2030, especially in the 6th goal, clean water and sanitation.



<http://www.carrying-water-project.jp/en/>

yusui@city.fukui-ono.lg.jp



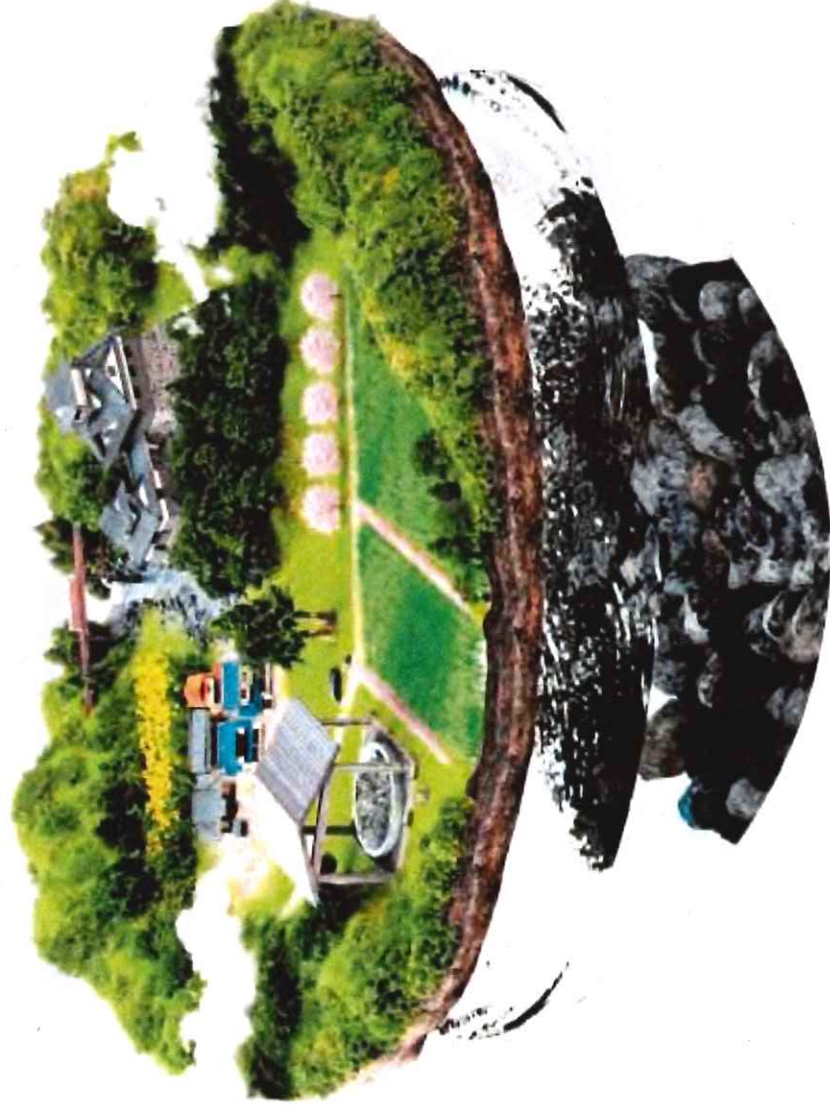
○ 是非皆さんも、私どもの理念に賛同いただけるのであれば、人類が助けあい、分かち合う、**思い合う**「結」の心に基づき、世界にまたがる水への恩返しを進めていきましょう。多くの方々からのご連絡をお待ちしています。

If you embrace our philosophy, we can work together to develop to share the “Gratitude for Water” which stands on the “Yui” spirit as humanities, sharing and kindness.

I’m looking forward to speaking further with you all.

結の故郷 越前おおの

「水への恩返し Carrying Water Project」



水への恩返し



Carrying Water Project

水への恩返し Carrying Water Project とは



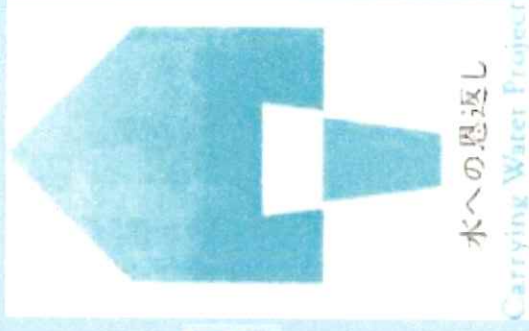
①豊かな水に育まれた「水の箱庭」



②枯渇の苦難を乗り越えた歴史



③古来より伝わる「結」の心

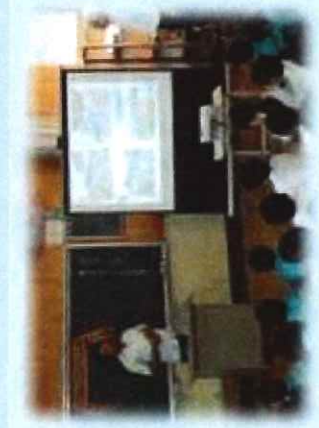


- 古くから地下水が豊富であり、高度経済成長期に起きた枯渇を克服し、現代でも水に生かされている大野市が、
- 人々が助け合い、地域と地域、人と人をつなぐ、大野市の伝統である「結」の心に基づき、
- 水のありがたさを「水への恩返し」として様々な形で世界中と分かち合うことを通じ、地球の将来や人々の幸せに貢献していくことを目指すプロジェクト。

(単なる「名水のまち」ブランドではなく、)大野でしかできない、水を通じた「ソーシャルな人口減少対策」という新しい試みへ

「水への恩返し」 具体的な取組の全体像

① 東ティモールへの支援 (市民の意識啓発、自信と誇り)



② 水がかっこう

③ 水をたべるしストラン

④ 水環境の
保全・継承

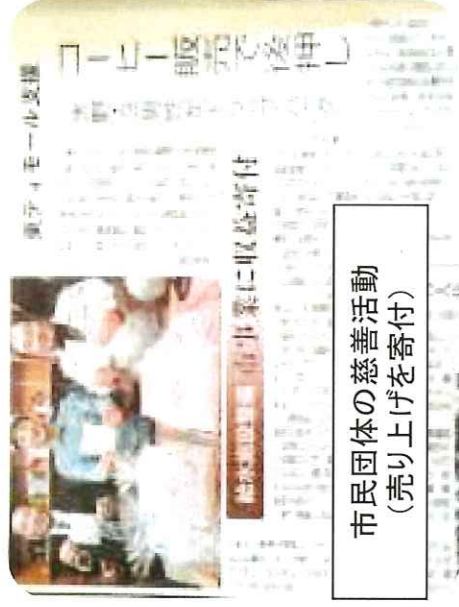
⑤ 意識啓発
賛同の輪の拡大

① 東ティモールへの支援と交流

結の心に基づき、グローバルな水問題への貢献として、アジアで最も水環境が厳しい東ティモールの現状を知り、市民が自ら行う寄付等を通じて、水のありがたみをシェアすることを通じ、大野市民が普段当たり前に使っている水のありがたさを再認識し、地域に対する自信と誇りも高める

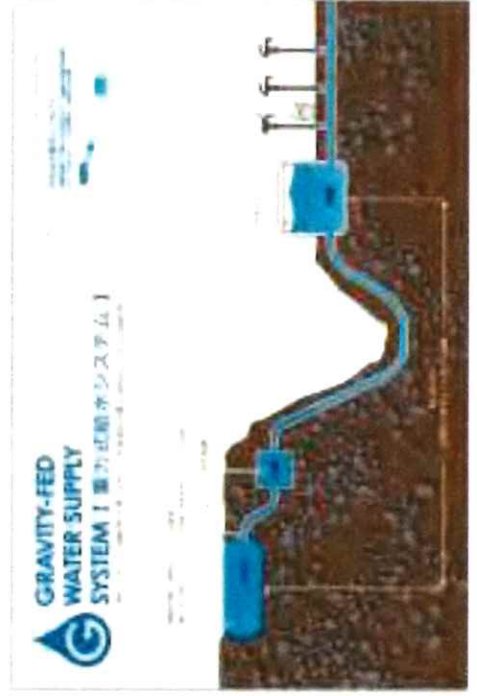
自治体初！

日本ユニセフ協会
を通じての支援



市民団体の慈善活動
(売り上げを寄付)

年間10万ドル×3年間の支援
→市民や市内団体からの寄付で調達
現地に水道システムを整備(下図)



走った距離だけ水支援
(越前大野名水マラソン)

① 東ティモールへの支援と交流

ユニセフ1回目視察



ユニセフ2回目視察(完成状況確認)



① 東ティモールとの交流(今後)

【市民交流】

- ・ 支援自治体との友好関係構築
- ・ 水道を作るだけでなく、守るためのノウハウ(=結の心)の共有
- ・ 市民同士が交流し、互いの文化を分かち合い、刺激しあう場の構築 等



エゴ・レモス氏による
東ティモール講座(2017.5)

JICA自治体連携調査団
(2017.8)



【経済分野】

- ・ 研修生の招聘、各分野での労働力としての活用(=東ティモールへの技術の伝搬、大野の雇用状況改善)
- ・ 特産物振興(コーヒー、バナナなど) 等

【スポーツ】

- ・ オリパラのホストタウン
- ・ 大会への参加(名水マラソン等?)
- ・ 選手の強化、青少年育成 等



② 水のがっこう

これまで大野で蓄積されてきた水に関する知見等をシェアし、将来を担う子どもたちが水について学び、大切さを実感し、世界の水について考える機会の提供や、全世界に向けた情報ネットワークの構築などを通じた水に関する研究活動等の推進等により、世界の水問題に貢献する

○『水の本』作成・活用

日本ユニセフ協会を通じて、約40,000部を今秋全国の小学校・中学校・高校等に配布したところ、1000冊を超える追加配布要望と、講義依頼が殺到

配布要望	12校
出前授業要望	4校
WEBから使用	2校

※平成29年12月15日現在



出前授業(市内、県内、県外)



各種企業等での活用



② 水のがっこう

○ 全国の学校へ出前授業を実施

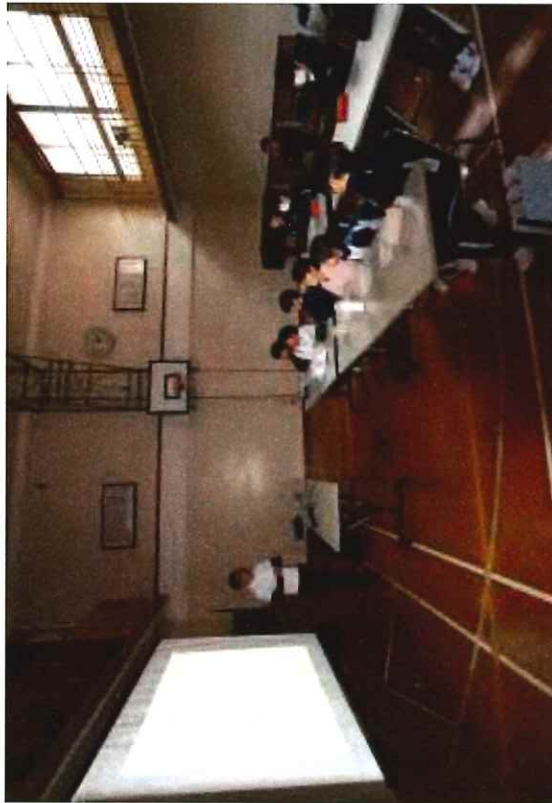
平成29年9月7日 福井県大野市立有終南小学校



平成29年12月6日 福井県福井市立明新小学校



平成30年1月17日 徳島県海部郡美波町立伊座利校



平成30年1月24日 茨城県古河市立古河第七小学校



② 水のがっこう

これまで大野で蓄積されてきた水に関する知見等をシェアし、将来を担う子どもたちが水について学び、大切さを実感し、世界の水について考える機会の提供や、全世界に向けた情報ネットワークの構築などを通じた水に関する研究活動等の推進等により、世界の水問題に貢献する

○ 水に関する知見の集積

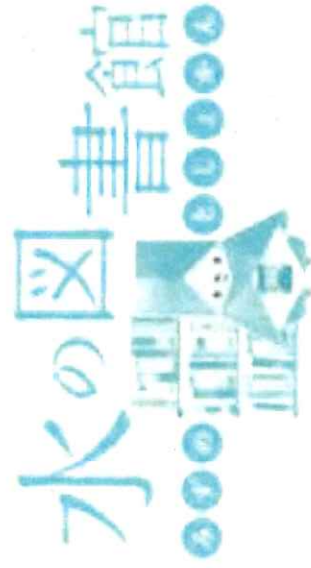
- ・これまでの地下水保全の知見や、昭和44年から蓄積したデータ、論文等をデジタルアーカイブ化し、Web上で公開
- ・ 水に関連する各種研究の受け入れ態勢の充実
- ・ 水に関連する研究の募集及び推進 等

※大野市をフィールドとしている研究機関：

筑波大学、香川大学、同志社大学、早稲田大学、関西大学、
総合地球環境学研究所、国交省 国土情報課、国土技術政策総合研究所



水のがっこう



③ 水をたべるレストラン

水環境の素晴らしさや湧水文化の価値を食というメディア（媒体）の形にし、より多くの人にそのおいしさを体験してもらおうことを通じ、水のありがたさを社会に広く伝えていく



2017年8月1日「一夜限りのレストラン 打波古民家の夜」開催。
水の恩恵を受けた産物と料理をふるまう一日限りの野外レストラン。

食や水に関する有識者やキーマンをお招きし、大野を愛する若い市民有志のチーム「ミズカラ」の9人のメンバーが、会場、料理、おもてなしのすべてを担ってくれました。



④ 水環境の保全・継承

「水への恩返し」の土台である、貴重な水環境・湧水文化を後世に伝えていくため、湧水の源である森林の保全や、地下水位を保つための湛水事業などを社会全体で進めていく



水田湛水事業
(市内の約30haで実施)



どんぐりの森づくり事業



事業者等への募金箱の設置依頼(市内220か所)
各種イベントでの募金活動 等

「一般財団法人 水への恩返し財団」を設置し、官民が連携して取組を進める体制を構築

- ・ 水環境の保全と改善に寄与する事業
- ・ 水への感謝の思いを醸成する事業
- ・ 安全な水が供給されていない地域を支援する事業

⑤ 一 意識啓発・賛同の輪の拡大

水に対する市民の意識をさらに高めるとともに、「水への恩返し」の理念に賛同いただける企業・大学等の各種団体からのご支援をいただき、活動の継続・発展を図る

- 「水への恩返しパートナー」の募集
- 各種講演会等での活動紹介・理念の浸透促進



H29.12.8 地方創生フォーラム「まちてん」



mont-bell



Kubota



豊かな水を、次の世代にも。

With Water, with you.

TTMS 月島テクノメンテナーサービス株式会社





「ウォータープロジェクト」では、多くの企業が取り組まれている水の取り組みを紹介するとともに、国民の皆さまにも水の重要性や正しい情報を発信しています。



1 「一夜限りのレストラシ」への参加

2 Water Project参加企業との仲立ち

→ 「水への恩返しパートナー」として連携へ

【主な事例】

- (株) ネピア ⇒ 市民向けイベントへの参加(取組発表、商品提供)
- メタウォーター(株) ⇒ 小学校での特別授業「うんち教室」
- (株)伊藤園 ⇒ 「水の本」の増刷費用支援(20万円)
- (株)ミツカン ⇒ 「まちてん」への出展
- ⇒ 今後の広報活動等での連携を協議中



3 各種広報活動への参加

H29.10.28 CDP国際シンポジウム
(環境省共催・同時通訳付)

⑤ ー2 第8回世界水フォーラムへの参加

○開催日 平成30年3月18日(日)から23日(金)

○場所 ブラジル ブラジリア
国立競技場「マネ・ガリンシヤ」敷地内

○テーマ 「Sharing Water」

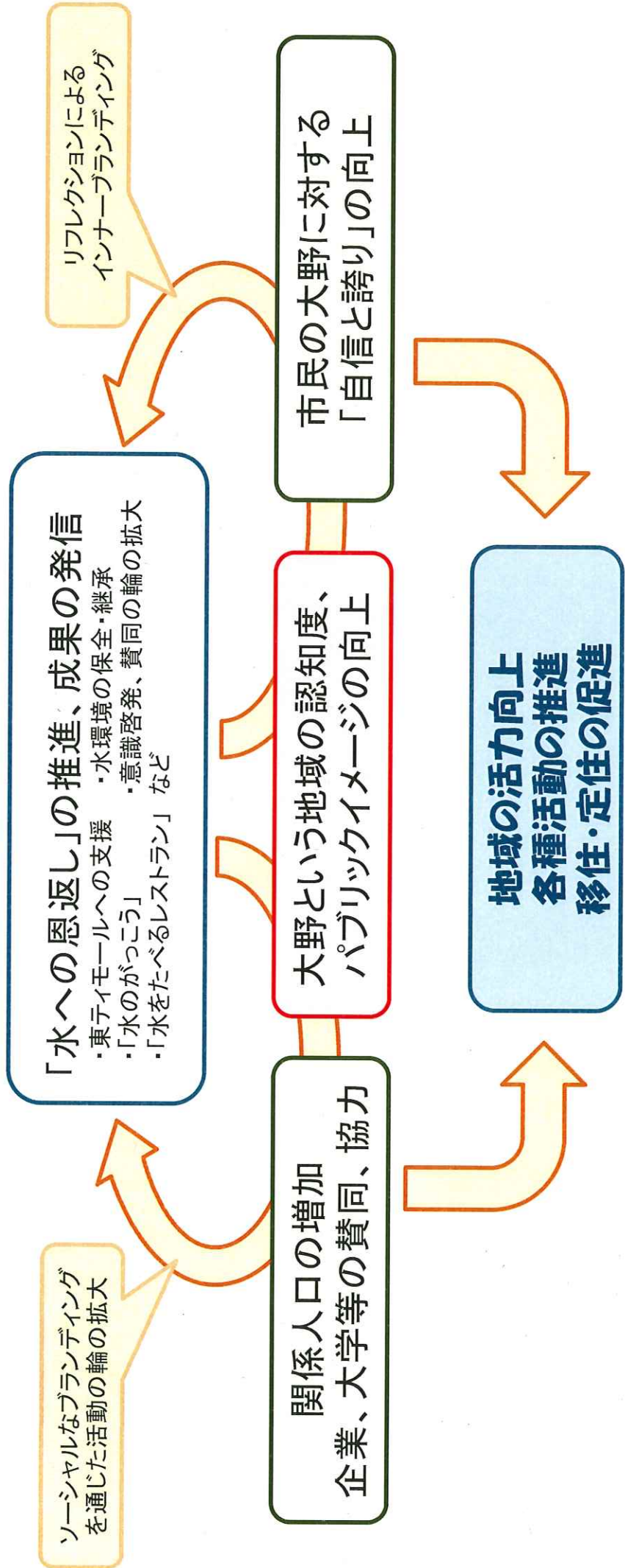
(参考) 第7回：韓国で開催
朴前大統領、太田国土交通大臣、
他168か国、40,000名以上が参加



同フォーラムに参加予定の滋賀県を訪問し
現地でのお力添え等を依頼
(右から2番目の方が池永滋賀県副知事)

水を通じた「ソーシャルな人口減少対策」

若者を中心に、「ソーシャルビジネス」をはじめとした、社会に貢献する取組の価値が再認識されており、そういう「真っ当な」役に立つ「意義を感じられる」取組であれば、地方創生の取組が過当競争（飽和状態）となっている中でも、その地域の魅力を高め、内外の人々を惹きつけ、結果として中長期的な人口減少対策となる



「越前おおのみずコトアカデミー」

大野での暮らしや、若者が活躍する地域づくりに関心をもつ首都圏在住の方を対象とし、「水」を切り口として、「越前おおのみ」を知ってもらうための連続セミナーを開講
関係人口の増加を図るとともに、将来的な移住者の確保にも繋げていく

<講師>



■ 指出 一正氏

『月刊ソトコト』編集長/株式会社木楽舎 取締役



<メンター>



■ 長谷川 和俊氏 (大野市出身・在住)

映像作家 デザイナー



<参加者>

13人 (男7人、女6人、20代~50代、県内出身者4人を含む地方出身者が多数)

スケジュール

講座回	月日	会場名
第1回	12月10日(日)	リトルトーキョー
第2回	1月27日(土)	
第3回	2月10日(土) ~12日(月・祝)	大野市内での現地実習 2泊3日
第4回	2月24日(土)	リトルトーキョー
第5回	3月10日(土)	

「水」の先進地 フランスとの連携

- フランス環境移行・連帯省からのオファーを踏まえ、フランスの政府機関や自治体における、水のブランド化、水資源の管理及び水を通じた社会貢献に関する取組の調査や意見交換を実施
- 水支援での連携先として、現在アグド市、オルレアン・メトロポールとの間で具体的内容を検討中
- 水や教育、文化、食など幅広い交流について、現在アグド市との間で検討中



アグド (Agde) 市長との
意見交換
(大野市長の親書を手渡す)



ペリュサンの酒蔵「昇涙酒造」
(大野の「花垣」とのご縁)

持続可能な開発目標 (SDGs)

<p>(①貧困)</p>  <p>1 貧困をなくそう</p>	<p>(②飢餓)</p>  <p>2 飢餓をゼロに</p>	<p>(③保健)</p>  <p>3 すべての人に健康と福祉を</p>	<p>(④教育)</p>  <p>4 質の高い教育をみんなに</p>	<p>(⑤ジェンダー)</p>  <p>5 ジェンダー平等を實現しよう</p>	<p>(⑥水・衛生)</p>  <p>6 安全な水とトイレを世界中に</p>
<p>(⑦エネルギー)</p>  <p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p>	<p>(⑧成長・雇用)</p>  <p>8 働きがいも経済成長も</p>	<p>(⑨イノベーション)</p>  <p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p>	<p>(⑩不平等)</p>  <p>10 人や国の不平等をなくそう</p>	<p>(⑪都市)</p>  <p>11 住み続けられるまちづくりを</p>	<p>(⑫生産・消費)</p>  <p>12 つくる責任つかう責任</p>
<p>(⑬気候変動)</p>  <p>13 気候変動に具体的な対策を</p>	<p>(⑭海洋資源)</p>  <p>14 海の豊かさを守ろう</p>	<p>(⑮陸上資源)</p>  <p>15 陸の豊かさも守ろう</p>	<p>(⑯平和)</p>  <p>16 平和と公正をすべての人に</p>	<p>(⑰実施手段)</p>  <p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p>	

ロゴ：国連広報センター作成

日本自身の課題に関係が深い目標の例

- 成長・雇用 ●クリーンエネルギー ●イノベーション ●循環型社会(3R:Reduce Reuse Recycle 等)
- 温暖化対策 ●生物多様性の保全 ●女性の活躍 ●児童虐待の撲滅 ●国際協力 等

「水への恩返しパートナー」へのお願い

【全体】

○ CWPを担う「水への恩返し財団」の活動全般へのご寄付

【個別の取組の例】

① 「水の本」の増刷費用のご寄付、普及促進に向けたご支援

- ・ 増刷分の「水の本」を活用する際に、貴社・貴団体についてご紹介させていただきます
- ・ 貴社・貴団体における取組の教材としてご活用いただくことも可能です

② 東ティモール支援・フランスと連携した国際協力の資金のご寄付

- ・ UNICEFやJICAなど公的機関との取組にタイアップいただくことができます
- ・ 東ティモール政府、フランス政府・自治体との連携プロジェクトを幅広く検討中です

③ 「水をたべるレストラン」へのご参加

- ・ 商品・メニューの共同開発や、市内イベントへの参加を通じ、宣伝活動に使っていただけます
- ・ 「一夜限りのレストラン」のスポンサーとして、市外のインフルエンサーの力も活用できます

④ 水にまつわる研究体制の整備へのご寄付

- ・ 総合地球環境学研究所と連携した、研究・滞在施設の整備に当たり、ネーミングライツの御提供や、産学連携の研究テーマの設定(マッチングファンド形式)などができます



客観的視点が鍵。行政マンからの提言

特別セミナー

福井県内の企業、団体で働く若者から世代を越えリーダーを育成する「海陸空」(江海空)福井県青年行政リーダー育成プログラムが、11月25日、アイオニヤで開かれた。「海陸空」は、2013年にスタートし、県内は5期目。この日は県立生と塾生0.63名が参加した。講師は、いづれも行政に携わる福井県出身者および県内の自治体に出向経験のある3名で、それぞれが異なる分野でのテーマを用いて分析、講義し、参加者の視点で課題を講じた。



根来恭子氏

～地域課題を生かした
職人意識～



「了らぬことか、
日本各地の職人意識」
「職人意識」とは、
職人が自分の仕事に
誇りを持ち、責任を
果たすことである。
これは、単に技術を
習得するだけでなく、
その仕事を通じて
社会に貢献すること
を意味する。職人意識
は、職人の生きかた
であり、その生きかた
が社会に与える影響
は大きい。職人意識
を高めることは、
社会の発展に大きく
貢献する。職人意識
を高めるためには、
職人が自分の仕事に
誇りを持ち、責任を
果たすことが大切
である。職人意識を
高めるためには、
職人が自分の仕事に
誇りを持ち、責任を
果たすことが大切
である。

「了らぬことか、
日本各地の職人意識」
「職人意識」とは、
職人が自分の仕事に
誇りを持ち、責任を
果たすことである。
これは、単に技術を
習得するだけでなく、
その仕事を通じて
社会に貢献すること
を意味する。職人意識
は、職人の生きかた
であり、その生きかた
が社会に与える影響
は大きい。職人意識
を高めることは、
社会の発展に大きく
貢献する。職人意識
を高めるためには、
職人が自分の仕事に
誇りを持ち、責任を
果たすことが大切
である。

客観的な視点で観光資源を磨く

今洋佑氏

～県民の風通しよみがらみ～



「客観的な視点で観光資源を磨く」
「客観的な視点」とは、
自分の立場や感情を
排して、客観的に物
事を捉えることであ
る。これは、観光資
源を磨く上で、大
きな役割を果たす。
客観的な視点で物
事を捉えることは、
観光資源の魅力を
引き出し、観光客
を惹きつけること
につながる。客観
的な視点で観光資
源を磨くためには、
客観的な視点で物
事を捉えることが
大切である。

「客観的な視点で観光資源を磨く」
「客観的な視点」とは、
自分の立場や感情を
排して、客観的に物
事を捉えることであ
る。これは、観光資
源を磨く上で、大
きな役割を果たす。
客観的な視点で物
事を捉えることは、
観光資源の魅力を
引き出し、観光客
を惹きつけること
につながる。客観
的な視点で観光資
源を磨くためには、
客観的な視点で物
事を捉えることが
大切である。

突き抜けた取り組みで世界を目指す

「自己ごと」化してもらえる情報発信を

高島賢氏

～情報力と共働り～



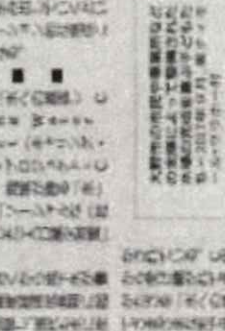
「自己ごと」化してもらえる情報発信を
「自己ごと」化とは、
自分の生活や仕事に
密着した情報を発信
することである。こ
れにより、発信者は
自分の生活や仕事に
関心を持ってもら
え、情報発信の意
義を認識してもら
える。自己ごと化
した情報発信は、
社会に貢献するこ
とにつながる。自
己ごと化された情
報発信を行うには、
自分の生活や仕事
に密着した情報を
発信することが切
要である。

「自己ごと」化してもらえる情報発信を
「自己ごと」化とは、
自分の生活や仕事に
密着した情報を発信
することである。こ
れにより、発信者は
自分の生活や仕事に
関心を持ってもら
え、情報発信の意
義を認識してもら
える。自己ごと化
した情報発信は、
社会に貢献するこ
とにつながる。自
己ごと化された情
報発信を行うには、
自分の生活や仕事
に密着した情報を
発信することが切
要である。

新たな地方創生戦略

「水で世界、大野を潤す」
「水で世界、大野を潤す」
は、大野市の水資源を
活用し、世界に貢献
することを目的とし
た戦略である。こ
の戦略は、大野市
の水資源を有効に
活用し、世界に貢
献することを目的
としたものである。
この戦略は、大野
市の水資源を有効
に活用し、世界に
貢献することを目
的としたものである。

今洋佑・大野市副市長



「水で世界、大野を潤す」
「水で世界、大野を潤す」
は、大野市の水資源を
活用し、世界に貢献
することを目的とし
た戦略である。こ
の戦略は、大野市
の水資源を有効に
活用し、世界に貢
献することを目的
としたものである。
この戦略は、大野
市の水資源を有効
に活用し、世界に
貢献することを目
的としたものである。

「水で世界、大野を潤す」
「水で世界、大野を潤す」
は、大野市の水資源を
活用し、世界に貢献
することを目的とし
た戦略である。こ
の戦略は、大野市
の水資源を有効に
活用し、世界に貢
献することを目的
としたものである。
この戦略は、大野
市の水資源を有効
に活用し、世界に
貢献することを目
的としたものである。

主催：福井県庁、福井新聞社、福井県青年行政リーダー育成プログラム



御寄附、御支援、その他の問い合わせは下記まで

一般財団法人 水への恩返し財団

(事務局：大野市湧水再生対策室)

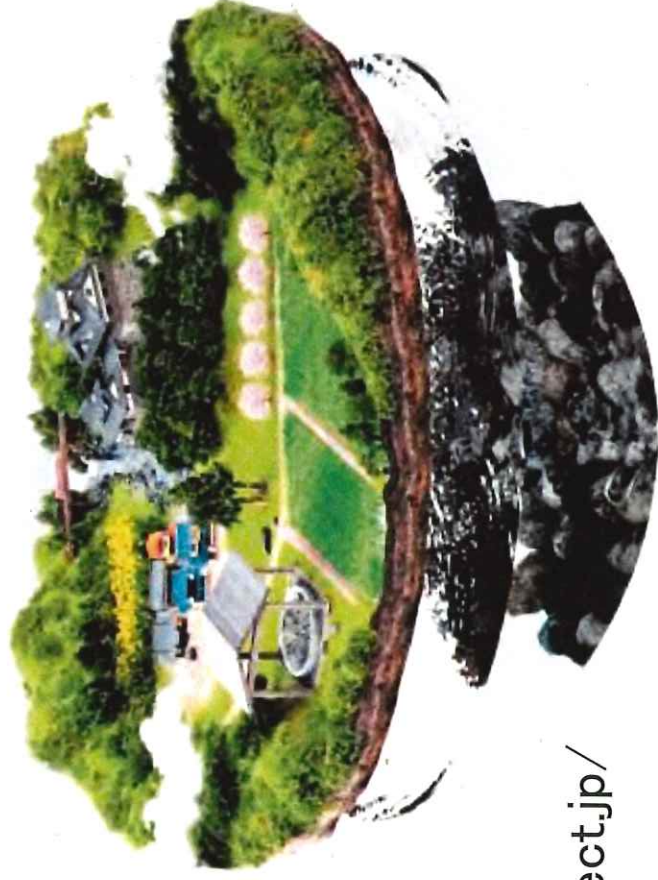
〒912-8666 福井県大野市天神町1-1

TEL: 0779-64-4813

FAX: 0779-66-1118

Email: yusui@city.fukui-ono.lg.jp

Web: <http://www.carrying-water-project.jp/>



水の巡りに感謝するまち。

水の箱庭、越前おおの。